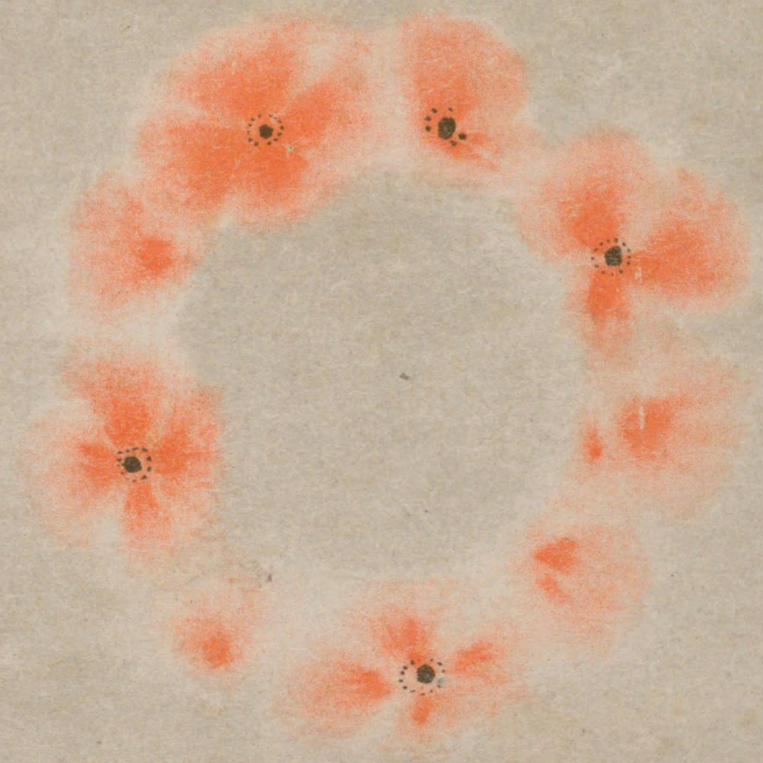
582-140
1200800927888



華鬘

加藤武雄著

大日本雄辯會講談社版

髮華

加藤武雄著

大日本雄辯會講談社版

582
140

I 種
W

1200800927888

目次

悲みの家……二
或る兄弟……一五
美しき獸……二二
歩きながら……三二
墓參……三七
靜かなる愛……四六
貧しい畫家……五五
或る結婚問題……六九
日本の女……七五
使者……八四
或る會見……九六
彼の心彼女の心……一〇五

責むる者……一一三
不幸なる告白……一二二
哭いたあとで……一三四
夢魔……一三九
新生活……一四八
思ひ妻……一五四
春の一夜……一六五
傑作……一八二
愛と藝術……一九〇
秋の雨……二〇〇
裂かれた繪……二一〇
職業婦人……二一八
歸り途……二三〇
病みてあれば……二三九

男の中……二四四
羊の皮……二五四
見舞……二六八
妖婦の嘆き……二七四
二つの好意……二八三
陰影のある會話……二八九
隱れた保護者……三〇〇
二人の畫家……三〇九
狼の口……三二三
危機……三三二
諜者……三四一
あらしを衝いて……三五三
妻歸らず……三六五
汽車の中……三七二

華鬘

加藤武雄

目次

混沌……三七八
夢と現の間……三八六
俘虜……三九九
傀儡師……四一一
毒汁……四一九
病院で……四三五
本當の私……四四九
狂憤……四五八
二度目の告白……四六七
破裂點……四七七
ある自殺……四八五
愛人……四九一
二つの肖像畫……五〇一

悲みの家

自動車が、赤いポストの立つてゐるその横町の角まで來た時、都築專一は運轉手に聲を掛けた。

『こゝでいゝんだ。停めて呉れ！』

專一は、助手の手を待たずに、自分で扉を開けてひらりと飛び降りた。而して、料金を拂ふ間ももどかしいといふやうにして、急ぎ足で横町をはいつて行つた。

歩きながら時計を見た。未だ八時を一寸過ぎたばかりだつた。少し早過ぎるなと思つた。八代は寢坊な男だから、勿論未だ起きてはゐない。二年振りで會ふといふのに、寢込みに押しかけるのは些とをかしいな——。

が、此の思案も彼の歩度を沮むわけには行かなかつた。專一は一刻も早く、親友八代英吉に會ひたかつた。その妹の靜代に會ひたかつた。

實は專一は、昨日の午後一時、彼を歐羅巴から運んで來た汽船が横濱の岸壁に着いた時、そこ

に迎へに出てゐる英吉兄妹を見出す事を期待した。靜代の方は兎も角も、英吉だけは屹度出迎へてゐて呉れるだらうと思つてゐた。が、どうしたのか、數人の出迎へ人の中に英吉の姿が見えなかつた。何かの都合で横濱まで出て來られなかつたのか？　それならば、東京驛には出迎へてゐて呉れるだらうと思つてゐた。が、そこにも彼はゐなかつた。電報が屆かなかつたのか？　いや、そんな筈は無い。では、例のずぼらから、日取を間違へたとでもいふのか？

英吉はそんな間違へをしかねない。だが、靜代がついてゐるのだから——と思ふと、此の理由も信ぜられなかつた。では、病氣にでも罹つてゐるのか？　猛烈な神經衰弱に苦められてゐるといふ事は、手紙で聞いてゐた。若しかしたら、酷く弱つてゐて、それで出迎へが出來無かつたのかも知れない——。

そんな事を思ひながら、細い横町を幾曲りかして、それが目じるしの大きな銀杏の樹が、箒のやうな梢で晴れた朝空を掃いてゐる町角から、片側板塀、片側枳殼垣の露地めいた細道を二十歩ほどはいつて行くと、そこにあまり大きくない木の門が雨曝れて立つてゐた。

半ば開かれたまゝの扉をはひり、敷石を踏んで格子戸の前に立つた時、專一は何か知ら胸が騷

いだ。ベル・ボタンを押すと、しいんとした家内に、かすかにベルの鳴る音がしたが、いつまで經つても何人も出て來無かつた。留守かと思はれるほど、音も無く靜まり返つてゐた。專一はもう一度、ベル・ボタンを押した。

やがて、物の氣配がして、すうと紙障子が開いた。若い女中が突膝をして見迎へた。

『いらッしやいますか？　都築です』

專一は笑みを含みながら云つた。

『都築樣と仰有いますんで？』

『然うです。都築專一と仰有つて下さい』

『一寸お待ち下さいまし』

と云つて女中は奥へ引込んだ。

しばらくすると、慌たゞしい足音がして、走るやうにそこへ出て來たのは靜代だつた。

『まあ、都築さん！』

靜代は、大きな眼を睜つて懷かしげに云つた。——內部が暗いので、靜代の顏はくつきりと浮

んだやうに見え、その眼は夜光る珠のやうに深く輝いて見えた。專一は靜代の顏を見返してにやにやと笑つた。一寸、何と云つていゝか判らない氣がした。

『どうぞ、おあがり下さいませ』

靜代に導かれて通つた部屋は、玄關脇の、そこだけが洋間になつてゐる英吉の書齋だつた。窓に繁つた常磐樹の爲めに、水の底めくうす暗さを湛へた部屋は、左右の壁につくりつけになつた書棚の、ぎつしりと並んだ背皮の金文字を仄かにきらめかしてゐた。窓際に据ゑられた大きな書卓、入口の側の壁上に掲げられたシヤヴンヌの版畫。その簡素で、而して、稍ゝ陰氣臭い部屋の樣子は、二年前と些とも變らなかつたが、書卓の上には物も無く、すべてがあまりにきちんと取片附けてゐるばかりでなく、重く沈んで、ひやりと肌に沁みるやうな部屋の空氣が、主人の不在を彼に直覺させた。ぢや、八代は旅行中だつたのだなと、彼は椅子に腰をおろしながら、ひとりうなづいたのであつた。

『お歸りになりましたのね。御目出度うございます』

靜代は改めて挨拶した。

『はゝゝ。歸つて來ましたよ』

專一は磊落な調子で云つた。專一は、二年の間に、すつかり成熟し切つて、而して、美しくとのつた靜代をそこに見た。あの頃、すこし脾弱さうだつた身體も、痩形ながら嫋かに肉づき、希臘型の端正な顏は、稍ゝ淋しいが、それだけに氣品高く、內部から燃える魂の輝きといふやうなものが、靜かな深い美しさを彼女に與へてゐた。それはぱつと人の眼を打つ美しさでは無かつた。しみじみと人の心に沁み入るやうな美しさであつた。

『昨日は御出迎へしなきやならなかつたので御座いますが――』

靜代が詫びるやうに云ふのを、

『いや、そんな事は――』

と、專一は中途から浚つて、

『八代君は今日はお留守なんですか？』

と訊いた。

靜代は、眼を伏せた。その眼にちらと光つたものを專一は見逃さなかつた。何か此の人はひど

く悲しんでゐる――と、專一は思つた。

『旅行でもしてゐるんですか？』

專一は、ある強感に胸をふるはしながら、もう一度部屋の樣子を見廻すやうにして聞いた。

『都築さん！』と、靜代は顏をあげて、

『都築さん！　兄は死にました』

靜代は、はつきりした烏睛を、正面に專一の顏に注いで云つた。

『え？』

專一は、椅子から彈き上げられながら云つた。――英吉が死んだ？　專一は驚き乍らも自分の耳を疑つた。

『吃驚なすつたでございませう？　兄は死んでしまひました』

『何時です。どうしてです？』

專一は急き込んで聞いた。さう聞きながらも、彼は、どうもそれが信じられない氣がした。

『丁度、十日前の、先月の廿八日でした』

『どうしてです？　病氣は一體何だつたのです』
『病氣では無かつたので御座います』
『病氣では無かつた？　ぢや、どうして死んだのです？』
『自殺したので御座います』
『自殺？』
『えゝ。――おもて向には病死といふ事にしてあるんですが、本當は毒を呑んで――』
そこまで云ひかけると、今までわざとらしいまでに冷靜だつた靜代は、急に激しい悲みに引摑まれたといふやうに身をふるはして泣き出した。彼女は手巾で顏を抑へながら云ひ續けた。
『毒を呑んで死んだのでございます』
『どうして、そんな自殺などしたんです？　――自殺したなんて、僕にはどうしても信じられない、信じられない！』
『私も、何だか未だ本當とは思ひ切れない氣がするので御座います』
『はなして下さい。どうして英吉君は自殺などしたのです？』

『兄はひどい神經衰弱にかゝつて居りましたの』
『その話は手紙で聞いてゐました。そのせゐで、ひどく厭世的になつて居たやうですね。いや、元來、英吉君は厭世家だつた――。あの人はショオペンハウエルの弟子だつた』
專一は後半を獨言めいた調子で云つた。彼は、紐育で受取つた英吉からの長い手紙を思ひ出した。深刻な言葉で生命への呪詛が書きつけられてゐた。
『ひどい不眠症になつて、十日も二十日も眠れなかつたので御座います』
『ぢや、神經衰弱が昂じて、それで自殺したんですね』
『えゝ。でも、その爲めばかりでは御座いません。外に原因があつたので御座います』
『外に原因が？』
『えゝ』
『それは何です？』
『兄は失戀したので御座います』
『失戀？』

專一は、鸚鵡返しに云つた。あの八代が失戀した？　あの極端な女性憎惡者が？　國木田獨歩の女子禽獸論に共鳴して、苟しくも女性を人間の觀念で律する事を肯んじなかつた八代英吉が？

『失戀の爲めと云つてしまつてはいけないのかも知れません。失戀の爲めといふよりは、心が亂れて、どうにも始末がつかなくなつた爲めとでも云つた方がよろしいのかも知れませんけれど、兎に角、ある女の人が、兄の自殺の原因になつてゐた事は事實なので御座います』

『その女の人つて、一體何人なんです？』

專一は單刀直入的に訊いた。

『それが――』

と、靜代は表情を混亂させて、

『私にははつきり判らないんで御座います。兄は、その事に就ては一言も申しませんでしたから――』

『さうですか？　あなたにはわからないんですか？』

『えゝ。兄は、私にそれを耻ぢてゐたので御座いませう。戀をしてゐるといふ事などは、一言も

私には云ひませんでした。――しかし、兄が死んでから見つけたのですが、兄の日記にはいろいろ書いてあります。あなたが御覽になつたらその人が何人だかわかるかも知れません。それに、兄はあなたに手紙を遺して行きました』

『僕に手紙を？』

『えゝ』

靜代は、帶の間から鍵をとり出すと、書棚の一番下の曳出をそれで明けた。而して、革張の小さな手文庫を取出した。

『この中にあなたへの手紙も、それから兄の日記も入れて御座います。このまゝ、お持ち歸りになつて、お讀み下さいませ』

『さうですか？　ぢや、拜借して歸りませう』

扉にノックの音がした。靜代が開けると、女中が首をさし入れるやうにして、何か耳うちをした。

椅子に戻つた靜代は、

『母がお目にかゝりたいと申すので御座いますよ』
と笑ひながら云つた。
『えゝ、私も是非お目にかゝらなければならないんです。おつかさん、隨分お力落しで御座いませうね』
『えゝ。――あの都築さん』
と、靜代は折入つた調子で、
『兄が自殺した事は母には知らせて無いので御座いますよ。母の前には催眠藥の分量を間違へてそれで死んだといふ事にしてあるので御座います。どうぞそのおつもりでお話し下さいませ』
『承知しました』
やがて忍びやかな足音がして、
『靜代！』
と扉の外で呼んだのは、彼女の母の聲だつた。
『おはいんなさい。阿母様』

はひつて來た母親は、老眼鏡の中から、立ちあがつて迎へる息子の友達を見上げて、
『まあ、まあ、都築様』
と、情緒的に云つて、早くも涙含んだ眼をしばだたいた。まだ五十を越して間も無い筈の人の、あまり老人臭く老い込んだ様子が、最初の一瞥で彼の胸を痛ましめた。
『おツかさん。おかはり御座いませんか？』
專一は、懷かしげに云つた。
『はい、あり難う御座います。あなたは、御無事に御歸朝で、御目出度う御座います。大そう御立派におなりになつて――すこしおふとりになつたやうでは御座いませんか？』
『は。――私は、まあ、歸つて來ましたが、英吉君は何ていふ事でしたらう？　私には、どうも眞實と思はれないんです』
『私も未だ何だか夢のやうで――』
と、英吉の母は悚へ性なく涙を流して、
『あれが亡くなつた日の、その翌日にあなたからの御電報で御座いました。あれが、どんなに、

あなたのお歸りを待つた事でせう？　あなたがもう十日早くお歸りになつたならば、あれもあなたにお目にかゝれて、どんなにか喜んだのでせうですのに』

『僕も實に殘念です！』

專一も涙含んだ眼をしばだたいた。

『あれはあまり學問に凝り過ぎて、それであたまを傷めたので御座いますよ。――でも、あなたはまあ、相變らず御元氣で――』

英吉の母は、そこに死んだ息子の分身を見ると云ふやうにして、もう一度懷かしげに專一の顏を見た。激しい悲みに打摧かれてゐる『母』の姿は又なくいたましいものだつた。涙が涙を追うて靑ざめた頰を傳はり、それを抑へる手巾は見る間にしとどに濡れて行つた。物狂はしいまでに取り亂したその樣子を、專一は慰める術もなく打眺めてゐた。

『私とした事が、ろく〳〵御歸朝のおよろこびをも申上げないで――いらツしやる早々、こんな涙などお見せ申して――』

一としきり泣いたあと、英吉の母はやう〳〵氣を取直したやうにして、

『靜代、あちらへいらしつて頂いて、ゆつくり外國のお話でもうかゞはうぢやあ無いか？』

と、これも何時の間にか涙をすゝつてゐる靜代に云つた。

『本當に然うでした。いきなり、こんな可厭な事をお話申上げて、都築さん、ずゐ分びつくりなすつたでございませうねえ』

『本當におどろきました。僕には、どうしても眞實のやうな氣がしないのです』

專一は、もう一度部屋の樣子を見廻しながら、もう一度斯う繰返すのであつた。

或る兄弟

都築專一が、八代の家から歸つたのは、もう夜になつてからであつた。

『歸朝早々、何處をほつつき廻つてゐるのだい？　隨分疲れたらうに、二三日はゆつくり休んだ方がいゝぜ』

友人の遺書を入れた小箱を抱へて歸つて來た專一が、それを前に置いてぼんやりと考へ込んでゐると、兄の龍彥が、にやにやと笑ひながら云つた。龍彥はでつぷりとした身體を八端のどてら

に包み、湯上りのつや〳〵しい顔に太い葉巻をくはへて、ぶらりと彼の部屋にやつて來たのであつた。

『どうだい？　隨分面白い事があつたらう？　外國の女はどうだつたい？』

龍彦は、片手で椅子をひきよせると、どしりとそれに身體を投げ掛けるやうにした。

『女か？　兄さんはすぐそれだからな。女なんかは、唯、見て過ぎて來ただけさ』

『甘く云つてゐる。外國へ行つて、外國の女と遊ばずに來る奴があるか？　おれなどが外國へ行くとすれば、まあ、それだけの興味なんだがね』

『兄さんは然うだらうけど、僕は勉強に行つたんだからな』

『勉強、出來たかい？』

『うゝん。何も出來なかつた。鄕愁にかゝつて弱つた』

『意氣地の無い奴だな。尤も無理もないさ。待つてゐる人があつてはね』

『そんな事は無いですよ』

『歸る早々、逢ひに行つたね。はゝゝ！　どうだい？　彼女は健在だつたかい？』

『健在どころぢや無い。飛んだ事になつてゐたんだ。十日、丁度十日歸るのが遲過ぎた』

さうだ。十日早く歸つたならばむざ〳〵と殺しはしなかつたらうに――と、專一は返らぬ悔を又してもその心に繰返すのであつた。

『飛んだ事になつてゐたつて？　ぢや、心變りでもしたといふのかい？　はゝゝ！　いやに悄げてゐるね。顏色がよくないよ』

龍彦は、專一の顏をのぞき込みながら、面白さうに笑つた。

『心變りどころぢや無いんだ。もつと、大へんな事なんだ』

『嫁にいつてしまつたのか？』

『死んでしまつたのですよ』

『死んだ？』

『えゝ。自殺したのです』

『自殺したつて？　へえ、それはまたどういふわけなのだい？』

龍彦がひどく好奇心を刺戟されたらしく、一膝乘り出すやうにして問ひ掛けるのを見ると、專

一は、龍彦の前などにその友の死を語り出した事を悔いた。――專一は龍彦を兄とは呼んでゐたが、二人の間には血のつながりは無かつた。龍彦は、彼等の父の先妻の子で、專一は後妻の連れ子であつた。龍彦の母も專一の母ももう世に亡い人であつたが、實の子だけに彼等の父の愛は、より多く龍彦の方に集つてゐた。父の血を受けた事業家肌の、物慾の旺盛な龍彦は、銀行家たる父の仕事の後繼者として、亦、當然家督の相續者として、愛と共にその信頼をも得てゐたが、專一の方は、父にとつては、唯、一人の厄介者に過ぎなかつた。彼は空想的で、稍〻感傷的で、夙に藝術的傾向を示し、とりわけ畫を愛して、畫家として身を立てようと志した。高等學校を半ばで止めると、美術學校に籍を移してしきりに研究してゐたが、突然、思ひ立つて佛蘭西へ出かけた。これ等の事は勿論父のよろこぶところでは無かつた。畫など描きくさつて、同じべたべた塗るにしてもペンキ屋の方が未だ增しだ。さう父の德平は云つた。こんな風だから、專一は都築家にとつてあるか無きかの存在だつた。專一が歸つて來ても、何人一人歡迎して呉れるものも無かつた。龍彦とは、年も二つ三つしか違つてゐず、丁度恰好の兄弟だつたが、龍彦は專一を輕蔑し、專一はまた龍彦を冷眼視してゐたので、二人の間には兄弟らしい友情などはまるで無かつた。

性格に於て趣味に於て、その他すべての點に於て兩極端に立つてゐる二人は、何を話しても話が合はなかつた。――今、專一は、龍彦に向つて、つい、英吉の死に就いて語り出した事を悔いた。龍彦などとの冗談半分の坐談にもち出すには、それは、あまりに悲痛な、而して、嚴肅な出來事では無かつたか？

『え？　どうして自殺なんかしたんだい？　――だが、それは眞實の事なのかい？』

『本當です。――けれど、自殺したのは、女ぢや無いんだ』

專一は、うるささうに頭を振つた。

『女ぢや無い？　だつて、自殺したのは君の戀人なんだらう。とすれば、女ぢや無いか？』

『戀人なんて、そんなものはありませんよ』

專一は素氣なく云つた。

『一向云ふ事がわからんな』

龍彦は、烟の中から眼をぱちくりと瞬いたが――そして、にや〳〵と笑ひながら、尙ほ何か云ひかけようとしたが、專一がまるで相手にしようとしないのを見ると、それなり口を噤んでしま

つた。

『兄さん！』

と、專一は問うた。

『あなたは未だ結婚しないんですか？』

『未だしないさ』

『僕は、兄さんはもう結婚したものだと思つてゐた』

『結婚すれば、君のところへだつて通知ぐらゐするさ。——實はね、問題は持ちあがつてゐるんだが、親父と僕との意見が一致しないんで弱つてゐるんだよ。親父が貰へと云ふ奴は僕の氣に入らないし、僕の欲しいといふ奴は親父が不賛成だしね』

『それは困るね』

『君は知らないかも知れないが、あの十五銀行の宮川敬助ね、あすこの娘に秀子つてのがあるんだ。松井綠葉の弟子とかで繪をやつてゐる。繪はうまいさうだよ。一寸才媛で、相當シャンでもあるんだが、親父はそいつを貰へつて云ふんだ。先方でも呉れたがつてゐるんだがね』

『美人で才媛なら云ひ分が無いぢや無いか。どうして、その娘がいけないんです』

『別にその娘がいけないつてわけぢや無いんだ。外に無けりや僕はよろこんであの宮川秀子嬢と結婚するんだがね』

『ぢや、外に意中の人があるんですか？』

『うむ。まあ、さうなんだ』

と、龍彦は、濃い葉卷の煙の間からにや〳〵と笑ひながら云つた。

『それはどういふ人なんです』

『素的な美人なんだが、妙に冷い女でね。なあに、相手さへ承知して呉れりや、僕は親父なんか無視しちやつて、勝手に結婚して、外國へでも突走つてしまふんだがね』

『その對手の人は、ぢや、未だあなたの愛を受入れてゐないんですか？』

『殘念ながら、まあ、さうなんだ。それに就いて、僕は頼みがあるんだがね。君に仲に立つて一骨折つて貰ひたいんだがね、——その女は、君もよく知つてゐる人なんだ。その女とは僕よりも君の方が合口らしいんだ。だから、君に說いて貰へば、屹度うまく行くと思ふんだがね』

『こりやあ、大役だな。――だが、僕が知つてゐる人つて、一體それは何人なんです？』

『まあ、それはあとで云はう』

龍彦は、何故か、その女の名を云はなかつた。――專一も、別にそれ以上追窮する興味も無かつたので、そのまゝ押黙つた。

美しき獣

やがて龍彦が部屋から出て行つたあとで、專一は、靜代から渡された箱を卓の上で開けた。宵から木枯が吹き荒れて、庭樹の梢のざわめく音が潮の遠鳴のやうに聞える。窓帷の間から硝子窓の一部が銀のやうに輝いてゐる。戸外はあかるい月夜なのであらう。

先づ取出されたのは、朽葉色の角封の一通で、表に、『都築君へ、英吉』と書かれてゐた。ふるへる指先で封を切ると、彼は、ぎつしりと細かく書かれた書簡箋を片端からその眼で喰ひ切るやうにして讀んで行つた。

（都築君。もうすぐに歸つて來るといふ君を待たずに、僕は今此の世界から消えて行かうとしてゐる。君にだけは、もう一目會ひたいのだ。一目會つてから死にたいのだ。だが、全然生の執着を失つてしまつた僕には、而して、自分の命の醜さに堪へられなくなつた僕には、此の一日が、否、此の一刻がもうやりきれない重荷なのだ。僕は、此の自分といふものが可厭で可厭で、この上一刻もこんな醜い命を生かしておく事が出來ないのだ。すぐに歸つて來ようとする君にそむいて、遠く去つて行く僕を責めないで呉れ。此の世界のあらゆるものを否定する僕だけれど、君がこれまでの長い間示して呉れた友情だけは、尊くありがたいものとして、僕の心に刻みつけられてゐる。ありがたう！　僕は心から君に感謝する。）

手紙は、こんな風に書き續けられてゐた。

（僕が、此の重い命を引き摺りながら、今日まで生きて來たのは、唯、君に會ひ度い爲だつた。本當に、どんなに僕は君を待つたか？　だが、一方君の歸りを待ちながら、一方では僕は君の歸りをおそれてもゐたのだ。僕は、君に恥づかしい。このみじめな自分の姿を、僕は君に見せるに忍び無いのだ。）

此の邊から、文字の形が次第に亂れてゐた。もう書くのも面倒になつたといふ心持がそこに見

られた。

（僕が、どうしてこんなにみじめに破滅しなければならなかつたか？　君にだけは一通り聞いて貰ひ度いと思つて、僕は此の手紙を書き初めたのだ。だが、僕はもう此の上書き續けるのが可厭になつた。唯、一言、それが一人の女の爲めだといふ事だけを告げておく。率直に云へば僕は或る女に失戀したのだ。僕の女性觀は君も知つてゐる筈だ。『戀』などといふ字は、僕の辭書には無い筈だつた。況んや、『失戀』などといふ馬鹿らしい事が！　と、君は不思議に思ふだらう。だが、事實に於て、僕は、彼の輕蔑す可き髮の長い動物の爲めに、僕の全靈と全身とを滅茶々々にされてしまつたのだ。失戀も單なる失戀では無かつた。それは實に慘酷な飜弄だつた。僕は、猫に弄ばるゝ鼠のやうにその女に弄ばれたのだ。妖婦！　僕は彼女を憎む。いや、僕はあのやうな愚劣な動物の爲めに、斯くまでにみじめに破壞されつくした自分自身の、より以上なる愚劣さを憎む！　愚劣なる人生よ。僕は、斯の愚劣なる人生を唾棄する！）

手紙はそこで了つてゐたが、あとから書き足したらしい別に一枚の書簡箋には次のやうに書かれてゐた。

（僕が死んだあと、母と妹とは全く賴りの無い身となるであらう。彼女等の事を思ふと、僕の胸は痛むのだ。どうぞ、力になつてやつて呉れるやう君に賴む。靜代は、死んで行くものゝ無遠慮さで敢て云ふが、深く君を愛してゐる。不束な者ではあるが、末長く面倒を見ては貰へないだらうか？　死んで行く者の我が儘な願ひとして、僕は此の事を君にお願ひする。）

これを讀んだ時、專一の胸は思はず微風の草叢のやうに騷いだ。おゝ、靜代！　改めてこんな賴みを受けるまでも無く、靜代こそ、自分が此の世界に於て抱かうとする唯一人の女性だつた。まだ、はつきりと口に出して愛を語つた事こそ無けれ、冥々のうちに堅く誓ひ合つた二人では無かつたか？　專一が、もう一年の滯留期間を繰上げ、矢の樣な歸心に急き立てられて、急に斯うして歸つて來たのも、靜代を見度い爲めにばかりだつた。相思の人と海を隔てゝは、二年の月日もあまりに長過ぎた。

專一は、その書簡箋に眼を落しながら、今日二年振で會つた靜代の、悲みの故に一層奧深いものにされた美しさを幻影に浮べた。

だが、彼の前には、まだ讀まねばならぬ亡友の日記があつた。まことに、此の悲痛な死の記錄

を前にして、どうして樂しい戀の空想を追ふ事が出來よう。專一は、口もとに浮びかゝつた微笑を收めて、その黑いクロオス表紙のノオトブツクを最初の一頁から繰りひろげた。

日記と云つても、日附があつたり、無かつたり、勿論日を追うて毎日記されてゐるのでも無くその折々の心頭を掠めた感想を、ぽつり〳〵と認めて行つたといふ風なもので、處々に空白が殘され、書き方も、極めて簡單で而して主觀的なので、その斷片の中から、まとまつた一つの事實を探し出す事は極めて困難であつたが、冷嚴な理性と、物狂はしい情熱との相鬪ふ世にも稀な苦悶と懊惱とは、一字一句に重く暗く喘いでゐた。輕蔑しながら唾棄しながら、しかも、その女の不思議な魅力に引きつけられて行き、更に、さういふ自分自身を恥ぢ憤るといふやうな內心の分裂と葛藤とが、到るところに讀みとられた。

（おれは昨夜また彼女の家へ行つた。彼女の家には、例のKといふ男がゐた。キザな男だ。彼女がその男と何か面白さうに話してゐるのを、おれは默つて聞いてゐた。聞いてゐるうちに腹が立つてたまらなかつた。あんな愚劣な男と面白さうに話してゐる彼女の愚劣さに腹が立つたのだ。おれは席を蹴つて歸らうと思つたが、矢張歸る事が出來なかつた。Kは、おれに、『哲學者』といふ綽名をつけてゐる。『哲學者も矢張戀をするものか』などと云つて、おれを諷した。おれはくわツとした。おれは餘程Kを撲りつけてやらうかと思つた。）

（今日は、彼女の許でNといふ男に會つた。帝活のシナリオ・ライタアだとか云つてゐた。可厭な男である。こんな男を集めて萬遍なくお世辭を振撒いてゐる彼女は低級な女だ。素行の程も思ひやられる。彼女は美しい。しかし、唯、美しいだけなのだ。美しい獣なのだ。）

（おれは今日、あの女の前で、Kと口論をした。Kなんかを相手にいきり立つてゐる自分が恥づかしくなつて、中途で默つて了ふと、Kは勝つたつもりで得意さうに笑つてゐた。あの女もKと一緒に笑つてゐた。）

（おれの魂は、强くあの女を拒否してゐる。あの女に惹かれるのは、おれの此の肉體なのだ。おれはこの肉體を呪ふ。此の肉體を滅ぼしてしまひさへしたならば——。）

（おれは恥かしい。おれはもう生きてはゐられない氣がする。おれは、あの女の前に此の身を投げ出して、あの女の愛を求めたのだ。女王の前の奴隷のやうに——。何といふ醜態だ。おれは、あの女の裾に抱きつかんばかりにして、絨氈の埃に顏をうづめてあの女に哀願したのだ。どうぞ

おれと結婚して呉れ！　おれの愛を受け入れて呉れ！　おれは子供のやうに泣きながらかう云つてあの女に哀願したのだ。恥知らず！　おれはもう少しであの女のスカアトに接吻するところだつた。あの女は呆氣にとられてゐた。あの女は、へんに口もとを歪めて迷惑さうに苦笑してゐた。あなたは頭を悪くなすつていらッしやるのです。どうぞ、もう少しおちついて下さい！　これがあの女の挨拶だつた。おゝ！　何といふ馬鹿な眞似をした事だらう？　おれは、あの女にさう云はれると、一時に恥づかしさがこみあげて來た。おれの自尊心が急に眼を覺ました。おれは衝き動かされたやうに起きあがつた。そして、へんな聲を立てゝ笑つた。あの女はびつくりしておれの顏を見た。屹度、おれが氣が違つたと思つたのだらう？　あの女の顏にはさッと恐怖の表情が動いた。おれは實際、あの女に飛びかゝつて、咽喉をしめつけてやらうかと思つた。）

こんな風に書かれてゐるのを次々と讀んで行きながら、專一は、その女が何人であるかを探らうとした。そこまでは、『彼女』とか、『あの女』とか、しか書いてなかつたが、やがて、

（H子！　あいつは慥かに妖婦だ。白い牝狐奴！　おれの魂は、あの牝狐に喰はれてしまつたのか！）

といふ一節にぶッつかつた。H子！　Hといふ頭文字だけがそこで漸くわかつた。

（云ふ可からざる侮辱！　あの女はどこまでおれを翻弄しようとするのか？　おれは此の三日ばかりの間どんなに有頂天になつてゐた事だらう？　あの女は、おれの愛を受入れたのだ。あの女は慥かに然うおれに云つたでは無いか？　然う云つておきながら、おれにたつた一つの接吻をさへ拒んで、その上、人を呼んでおれを恥かしめさせるとは何事だ。あの女の兄だといふ男は、あの女に對する暴行者でゝもあるかのやうにおれを取扱かつた。出入を差禁める？　失敬極まる云ひ草では無いか？――それにしても、おれはH子が、これほどまでに怖ろしい女だとは思はなかつた。妖婦！　妖婦！　おれは何時か一度、屹度、あの女に復讐してやる。あの女ばかりではない。S家の人間共ことごとくがおれを侮辱してゐるのだ。おれは何を以て、この侮辱をむくいたらいゝのだらう？）

日記の文句は次第に物狂はしい調子を帶びて來た。あの、憂欝な、物靜かないつも口もとに懶げに微笑を浮べてゐる、いかにも若き哲人といつたやうな風格を具へた英吉の、これはまた何といふ取亂しやうであらう。

それから、憎悪の文字、呪詛の文字が同じやうな物狂はしさで書きつらねられてあつたが、やがてそれが、反省的な、同時に持前の厭世的な調子に代つて行つて、絶望と自棄との深い深い嘆息が、文字の底から聞えるやうに思はれた。極端な自尊と極端な自卑との交錯——そして、そこに益ゝ度を強めて行く極端な自己嫌悪。彼がいかにして、最後の處決にまで押し迫められて行つたか？　その經過が、次第に音階を高め行く樂譜のやうに次第に急迫の調子を加へてゆくその斷片語の裡にはつきりと讀み取られた。

（惡夢。惡夢。まことに人生は一つの惡夢に外ならず）

（悲慘な滑稽な道化役者よ。みじめなるが故に愈ゝ滑稽。滑稽なるが故に愈ゝ悲慘）

（女、女、女、女！　奇怪にして不思議な動物。H・S！　怖る可き吸血魔！）

（唯、一つの救ひ。死。——ピストルか毒藥か！　すべては唯一瞬の動作にて足る）

（昨夜、まどろみの中にH子を見た。非常に清らかな天女のやうな姿をして、H子はおれの前に微笑して立つてゐた。思はず、彼女の前にひざまづかうとしたところでおれは眼が覺めた。何といふ愚かな夢を見るものであらう？）

こんな風に書き續けられて、日記は、そこでぷつりと斷れてゐた。

H・S！

それが、彼を自殺せしめた女の名である事だけは慥かだつた。H・S！　專一はこの謎の頭文字を繰返しながら、それに相當する女の姓名を思ひ出す可く、あらゆる記憶の隅々を搔き探つて見た。

瀨戸晴子——といふ姓名が思ひ浮べられた。

それは、美術學校時代の友人の妹で、今たしかあるミツション・スクウルの英語教師をしてゐる女だつた。が、顏などもさう美しくない、こち〳〵と石のやうな感じのするその女は、このH・Sである筈はなかつた。

久子、秀子、福子——などと、頭文字にHのつく女名前を、思ひつくまゝに數へあげて行くうちに、專一はふと、房子といふ名にぶつかつた。房子といふ名から佐竹といふ姓が續いて思ひ浮べられた。佐竹房子！　然うだ——と專一は、その拳で思はず卓のおもてを拍つた。

佐竹房子！

かうその名を呼んで見たばかりでも、ぱッと眼の前に花の咲く映像が感ぜられる。主宰してゐた大銀行の破産から、危く刑餘の人にさへなりそこねて財界を引退し、今はたしか小日向臺町の方に、ひつそりと暮らしてゐる佐竹鐘次郎の一人娘の房子、一人娘ではあるが妾腹で、母は昔新橋で鳴らしたそれ者だつたとかで、その母の血を享けた彼女は、たとへば緋ダリヤの花のやうな濃艶な美貌の持主であつた。房子ならば、父の方の關係で、この家へも時々遊びに來た事もあり來合せてゐた英吉に自分が紹介した記憶がある。

『へえ？　あれで女子大學生。まるで女優の出來そこなひのやうぢやないか？』

あとで英吉は、苦々しく笑つてゐたが――では、彼を失戀に死なしめた女性H・Sは、あの佐竹房子であつたのか？

なるほどあの女ならば――と、專一は心にうなづいたのであつた。

歩きながら

あくる朝、專一は朝餐を濟ますとすぐに西大久保の八代の家に出かけた。靜代と一緒に英吉の

墓まゐりをする約束になつてゐたのである。

『あるきませう。ね、電車などに乘るよりは歩いた方がいゝわ』

靜代は、さう云つた。

『えゝ。あなたさへ宜ければ、僕は構ひませんよ。僕も歩く方がいゝのです』

『雜司ヶ谷は、すぐですわ。今日は風も無ささうだし――』

二人は歩いて雜司ヶ谷の墓地に英吉の墓をたづねる事にした。――二人はなる可く人通りの少ない道を選ぶやうにして肩を並べてゆつくりと歩いた。二人の心はしめやかな悲みに濡れながらも、かうして二人在る日に會ひ得たよろこびで、靜かにさゞなみ立つてゐた。

『お讀みになりまして？』

靜代は、二三十歩家を離れたところで、斯うはじめて口を切つた。

『えゝ。讀みましたよ』

『どんな事が書いて御座いまして？』

『極めて簡單なものでした。しかし、英吉君はずゐ分ひどく苦しんだのですねえ』

『えゝ。――あなたが傍にいらしつて下すつたら、あんな事にはならなかつたのでせうけれど――』

と、靜代はしつとりと濡れた黒燿の眼を足もとに落して、

『私にも母にも、何一言云はず、兄は、唯、自分だけで苦んでゐたのでございます。私は、でも斯う云つたんで御座います。兄さん、私にも少し話して下さいッて。そんなに一人でばかり苦んでゐないで、私にもまあ話して見て下さいッて。すると、お前なんかに話したつて仕方が無いつて、餘計機嫌を悪くするもんですから――私も、だから、どうしやうも無かつたので御座います』

靜代は、兄を自殺せしめた責任は、自分も亦負はねばならぬといふやうに、斯う云つて嘆息した。

『あの日記ですね、あれはあなたも御覧になりましたか?』

『えゝ。讀みました。あのH子といふ人・あなたにはおわかりにならない?』

『僕には大抵見當はついてゐるのですがね。あなたには、まるきりわからなかつたんですか』

『えゝ。兄があんなに苦んでゐるのですもの。私、それが何人かつて事がわかりさへすれば、その方のところへ行つて、兄の爲めに賴んで見ようと思つたのですけれど、兄はもう秘し隱しにばかりしてゐるものですから――。H子といふ名も、私はあの日記を見てはじめて知つたのでございます』

『さうですか?』

『H子といふ人がどんな人か知りませんが、死ぬ程の思ひを、あんなに慘酷にあしらはないでもと思ひます。私、日記を見てその人に腹を立てたので御座います。本當に、その女の人を憎らしいと思ふので御座います。あの日記に、H子の兄といふ人から、酷く恥かしめられたといふ事が一寸書いて御座いましたわね。あの時だつたので御座いませう。雨の降る夜でした。兄は傘もなしにびしよぬれになつて歸つて來て、ぐつたりと床の上に倒れたまゝ、齒を喰ひしばつて泣いてゐた事がありました。着物など泥だらけになつて居りました。そのあくる日の朝早く、私が若し見つけて禁めなかつたら兄はあの時もう自殺して了つたかも知れません。兄が、双物をもつて考へ込んでゐるところを見つけて、私、一生懸命に禁めたので御座います』

『そんな事があつたんですか？』

『私、そのH・Sといふ人に、一言恨みが云ひたいやうな氣がするので御座います。一體、あれは何人なので御座いませう』

『僕、種々と考へて見たんですが、靜代さん、あなたは、佐竹房子といふ女を知りませんか？』

『佐竹――房子――？　S・Hですわね。そんな女の人があるので御座いますか？』

『えゝ。ありますよ。あの佐竹房子といふ女ならば、大へんな媚婦なんです。英吉君とは前から知合の筈ですから、多分その女ぢやないかと思ひます』

『さう云へば、私、思ひ出しましたわ。兄が、死際に、何人か女の名を呼んだのですが、はつきり聞き取れませんでした。今、思ふと、何でも、ひさ子とか、ふさ子とか呼んだやうに思はれます。佐竹房子！　ぢや、屹度その人に違ひありませんわ。私、その人とわかつたら一度お目にかゝつて恨みを云はなければならないわ。――兄の一生があゝしてめちや〳〵になつて了つたのは、全くその女の人のせゐなんですもの』

昂奮の爲めにすこし頰を赤らめた靜代は、

『その人、一體どんな人ですの？』

と、思はず歩みと停めて專一の顏を見据ゑるやうにした。

專一は簡單に、佐竹房子の輪廓を描いて見せて、

『本當に許し難い奴です！　さういふ奴はうんと懲らしめてやらなければならないんです』

と、心からの憤りを以て斯う云つた。

そこで會話がとぎれた。二人は、死者の事から話頭を移して、二年の間互ひの胸に包んでゐた戀人同志の思慕の情を語り合ひたかつたが、それを語らうとすると妙に心が騷ぐばかりで、言葉が咽喉につかへてしまふのであつた。

二人はやがて早稻田を拔けて、雜司ヶ谷への細い急な坂を登つて行つた。

墓　參

二人は軈て墓地の區域に歩み入つた。欅並木の梢はすつかり黃ばんで、折々落葉がひら〳〵と、二人の肩に散りかゝつた。

『八代君と、よくこゝへ散歩に來たもんでした。八代君は非常にこの道が好きで、よく僕をこゝへ引ッぱつて來たものですよ』

專一は、しばらく續いた重い沈默の底からこんな風に話り出した。

『えゝ。私もこゝへよくつれて來られたものでした。靜代、いいところへ散歩につれてつてやらうと云つては、何處へ伴れて行つて下さるかと思つてゐると屹度此處なんですの。可厭ねえ、墓地なんかつて私が云ひますと、こんないゝところは無いと申しますの。銀座ばかりが散歩場所ぢやあ無い。銀座へ七度行く間には、せめて、一度はこゝへ來るがいゝのだ。こゝへ來ると心が靜まる。人間は時々心を靜めて、自分の魂と云ふものに就いて考へて見なけりやいけないなんて――いつも、そんな風に兄は云つて居りましたわ』

『さうでした。僕にもよくそれと同じ意味の事を云つて聞かせました。どんな無心の者でも、この墓の林に二三十分立つて見るがいゝ、屹度死を考へるだらう。死を考へる時にのみ人間は本當に賢くなれるのだ。さう八代君は云つてゐた。八代君に云はせると、墓地はつまり人間の心の淨水所で、出來る事なら、この墓地を日比谷公園あたりに移すといゝといふのが八代君の持論でし

たよ』

『まあ！』

と、靜代は淋しく笑つた。

『だが、斯うして八代君を此の墓地に訪ねようなどとは、夢にも思ひ掛けなかつた』

專一は嘆息するやうに云つた。

空はうらゝかに晴れて居た。何處かで墓守が燒く落葉の煙が白く立ちのぼつてゐる。大きく小さく、高く低く、白々と立ちつゞく石碑の林に、死の國の空氣はあくまで靜寂だつた。かすかに押し寄せて來る町のどよみも、此の靜寂を亂すには至らず、梢に鳴く小鳥の聲も何となく他界の消息めいて、心を遠く誘ふのであつた。

二人がとある角を曲つた時、ふと向ふから來る一人の女の姿が眼にとまつた。すらりとした長身に紫色のコートを着て、顎を深く黑いショールに埋め、俯向き勝ちに歩いて來るその女の姿が、蕭條たるあたりの景物のなかにくつきりと浮きたつて見えた。二人は齊しく眼を睜つたが、その女はじつと足元に眼を落したなり、こちらの二人には氣が附かなかつた。彼女の歩み

は、一足々々に重く物思ひを引きずつてゐるやうに見える。どうかすると、歩みを止めて、何か考へ込むやうにする様子が、いかにも深い悲しみを抱いてゐる者のやうに見える。

二人と彼女との距離は次第に接近して行つた。五六歩の間に近づいた時、彼女ははじめて氣が附いたやうにその顏をあげた。濃い眉、大きい眼、ぱつと花の咲いたやうな感じのする印象の強い美貌であつた。專一は、思はず引きうけられたやうに眼を睜つたが、次の瞬間には、

『あ！』

と、驚きの聲を立てた。

『あら！』

と、彼女もそれに應じた。同じ様な驚きの色が彼女の顏にもあつた。

『佐竹さん！　――たしか佐竹さんでしたね』

と、專一は驚きのなかに立直りながら云つた。

『都築さん、いつお歸りになつたのでございますか？』

『一昨日歸つたばかりです』

『まあ、さうでございましたか。私、ちつとも存じませんでした』

と、彼女は、その大きな眼で專一の顏を見ながら云つた。

『誰にも云はないで、だしぬけに歸つて來たんです』

『まあ、さうですか、ちつとも存じませんでした』

と、彼女は同じ事を繰返したが、その言葉はいかにも懷しげな言葉そのもので縋りつくやうな調子であつた。そしてその眼は、異常な熱を帶びて專一の顏にそそがれた。

專一は、妙に息窒る様な感じのうちに、からうじて心の動搖をおさへながら、しばらくの間言葉もなく押し默つてゐた。

が、自分の後に、物惑しげな顏附で立止まつてゐる靜代に氣が附くと、初めて我に歸つたやうにして、

『失敬します』

と、摺れちがつて歩き出した。

彼女も、靜代の存在に氣が附くと、再び狼狽を新にしたやうに、物云ひたげにわな〻かした

唇をそれなりつぐんで、靜代の方には無言の會釋を送り、專一には、

『御免下さいませ』

と挨拶して、そして別れた。

彼女と別れて二三町行きすぎてからであつた。

『あの方、どなた？』

靜代が訊いた。

『あれですよ。あれが佐竹房子ですよ』

『まあ』

『あなたに紹介しようと思つたんだが、まあやめときました。どうせあなたから好意の眼で見られる女ぢやないんだから』

と、專一は云ひ譯するやうに云つた。

『H・Sつてのは本當にあの方なんでせうか？』

と、靜代は思ひ惑ふやうにして、

『だけど、今時分こんな所に何しにあの人は來たんでせう』

『さあ、やつぱりお墓まゐりなのぢやないんですか』

『誰の？』

『八代君のですよ』

『まあ、圖々しいわね。自分で殺しておきながら、その殺した男のお墓參りに來るなんて』

靜代はいま〳〵しさうに云つた。靜代の心には、早くも激しい敵對意識が、房子に對して燃えあがつてゐるらしかつた。

『そこがつまり媚婦の媚婦たるところかも知れませんね』

『媚婦ならいゝけれど妖婦なんぢやありませんか』

『妖婦か？　はゝゝ。妖婦の妖婦たるところか』

『でも、美しい人だわね。まつたく凄いほど美しい人ぢやあございませんか』

靜代の顏には、憎惡といふよりもむしろ嫉妬に似た表情が浮んでゐた。

『美しい獸か？　八代君の日記には、さう書いてあつた。美しいには美しいが、あれは毒の花の

美しさです。同じ美しさでも靜代さんなんぞのとはまるで性質がちがふのです』

『あら、私なんぞ』

靜代は小さく叫んで、ぱつと顏を赤くした。

『いゝえ、靜代さんの方が餘程美しいですよ』

『おからかひになつてはいや』

『からかふんぢやありません。本當にさうなんです』

と、專一は眞顏になつて、

『だが、どうして八代君が、あんな低級な美しさに、あんなにまで魅せられたんだらう。八代君は、本當の美しさがわからない人ではない筈なのに。どうも僕には不思議で仕方がありません。——矢張そこが妖婦の妖婦たる所以なのか？』

專一は投げるやうに云つた。が、專一の心には、今會つた房子の異樣な熱を帶びた眼附や、懷しげな言葉附が、妙に惱ましい印象を殘してゐた。專一は、不思議な動搖がその心に引き起されたことを否むわけにはいかなかつた。

專一は、その自分の心に押し被せるやうにして云つた。

『僕は、八代君の日記を、あの女に讀ませてやりますよ。そしてあの女にある制裁を加へてやるつもりです。何等かの方法で、きつと八代君の敵はとつてやります。實際、あゝいふ人間は、許し難い存在なんだ』

『私も、一言恨みは云つてやり度かつた』

『ぢや、矢張紹介すればよかつたね』

そんな事を話しながら、二人はいつか八代家の墓の前にたどりついた。

型通り樒の腰垣に圍まれて四坪程の墓域には、國文學者として、一代の大名を擁してゐた萬吉の父の、その多くの弟子達によつて建てられた大理石の、かなり大きな石碑が立つてゐた。而して、其傍に、生々しい白木の卒塔婆が、記された戒名の墨色もまだ新らしく、盛り上つた土の上に突きさゝれてゐた。その前の白木の膳には香や水が、青竹の花筒にはさま〴〵の花が手向けられてゐたが、中に眞白な大輪の菊の花束が、切り立ての香も高く濕つぽい土を匂はしてゐた。

そして、たてたばかりの線香の煙が、その眞白な花瓣に、ほの紫に劃れかゝつてゐるのは

たつた今一足ちがひにこの墓を見舞つた人のあつたことを語つてゐた。そして、それが佐竹房子であることは、問はずして明かであつた。墓の前に立つた靜代は、ひざまづいて手を合せようとしたが、何と思つたか、いきなり手を伸してその菊の花束を取りあげると、

『まあ、こんなもの』

と、云ひながらそれを足元にたゝきつけた。そして、臙脂色の鼻緒の草履の下に、それを踏みにじつた。花は無殘に土にまみれて碎けた。

專一は、しとやかな靜代の、その人らしくないしぐさを、じつと眺めてゐたが、靜代はその專一の眼を見迎へると、自分のはしたなさに氣がついて、少し恥ぢる樣に顏を赤めた。そして、

『だつて、口惜しいんですもの』

と、涙ぐんだ眼をして云つた。

靜かなる愛

二人は用意して來た香を捧げ、花を手向けてから、心を籠めて禮拜した。

靜代は、手を合せて眼を閉ぢてうなだれた顏を、いつまでもいつまでもあげようとはしなかつた。白足袋の踵に薄紫のふきを重ねて、かぼそい撫肩の、わづかに紅をまじへた裾袢の襟から、蔓を抽く花瓣のやうに白い後頸を見せて、いく筋かのおくれ毛に横顏を刷かせたその姿を、專一は傍に立つてじつと眺めた。而して靜代の、閉ぢた眼のつゞりあはされた睫毛を押しあげてあふれた涙の、やがて頰につたはつて來るのを見ると、專一も不覺の涙で瞼が熱くなるのであつた。

專一は、英吉がいかに靜代を愛してゐたかを知つてゐる。英吉に云はせると、世界中の女は皆、愚劣な醜惡な動物だつた。その中で、たつた一人の例外がある。それがつまり靜代であつた。『いや、あれだけは違ふよ、あれは君例外だよ』彼はいつも斯う云つてゐた。靜代もまたどんなに兄を愛したか？　それはまだ靜代が十三四の時であつたが、

『私、男の人では兄さんが一番好き』

と、彼女はすこし顏を赤くしながら云つた事がある。

『都築さんも好きだけど、兄さんにはかなはないわ、兄さんが一番好きで、その次が都築

さん――』

實際、二人は兄妹以上の兄妹だつた。父を有たぬ故だつたかも知れない、兄一人妹一人、たつた二人だけの同胞であつたせゐでもあらう。兎に角、二人ほど濃かな友愛を以て結び合つた兄妹は無かつた。だから、靜代の深い悲みも、まことにさこそと首肯かれる。專一は彼自身の悲みに併せて、靜代の悲みを思ふ悲みに、やるせなく胸を締めつけられた。しかも、その悲みの間にも、專一は、さうして兄の墓前に泣いてゐる靜代の姿を、一幅の靜かな美しい繪として眺める餘裕を失ひはしなかつた。

本當に何といふ靜かな美しい姿であらう！　ぱッと人の眼を擊たない代り、しみじみと人の心に沁みるやうなつゝましやかな美しさが、悲みに洗ひ出されて一層その感じを深めてゐるのを眺めながら、專一は、愈〻切なる愛着を、苦しいまでに胸に感じた。――勿論、今のさつき、佐竹房子の一瞥で波立たせられた不思議な心の動搖などは、あともなく消えてしまつてゐた。

やうやく立ちあがつた靜代は、まだ涙の濡れのこつた眼をまぶしげに細めて、やゝ恥づかしげに微笑して、

『もう、歸りませう』

と、專一を促した。

『えゝ』

しかし、專一はそこを動かうとはしなかつた。

二人は、あかるい午前の日を浴びて、四つの眼をひとしくその墓標にやりながら、身動ぎもせずに立つてゐた。あたりの空氣は、音もなくしいんと靜まつてゐる。深い『時』である。どんな深い會話でも出來さうな『時』である。かういふ時に交はされた言葉は、生涯消え去らず、互の胸に殘るであらうと思はれた。

『靜代さん』

と、專一はおもむろに口を開いた。

え？　といふ眼附で、しかし言葉は無く、靜代は專一を見あげた。

『僕はあなたにお話したい事があるんですが』

『何でございませう？』

『ここで話してはわるいか知ら？　――しかし、ここで、八代君の靈前でお話しするのが一番いいかと思ふんですが――八代君も墓の中から聞いて居てくれるだらうと思ふんですが――』

『……』

靜代はうなじを落した。彼女の胸が或る豫感の爲めに激しく騷ぎはじめた事は、手套を握つた彼女の手が、わな〳〵とふるへはじめたのにも知られた。

『僕は、八代君の遺書をこゝへ持つて來たんです。――それはあとであなたにも讀んで頂きますが、その手紙に、あなたの事が書いてありました』

靜代は、石像のやうに動かなかつた。

『ごく簡單にですが――あなたの生涯を僕に託するといふやうな意味の事が書いてあつたんですよ。あなたの面倒を見るやうにつて、さう書いてあつたんですが――』

靜代のうなじは、更に更に深く落された。

『僕は勿論――八代君の遺書にそんな事が書いてあるなしに拘らず、そのつもりでゐたんだが、しかし、あなたの心持もうかがつて見なければなりませんからね。あなたは、どんな風に思つて

下さるんでせう』

專一は、案外にすら〳〵とした調子で一息に斯う云つてしまふと、呼吸をつめるやうにして、うなだれた靜代の横顏をぢつと覗き込んだ。靜代の頰は、水に紅を落したやうに、見る〳〵赤く染められていつた。ありとしもない風にそよぐ後毛の蔭に、その可愛らしい耳朶も草蔭の花瓣のやうに燃え立つた。

『ねえ、靜代さん、僕がどんな風にあなたのことを思つてゐたか、あなたも知つてゐて下すつたでせう。僕が今度、豫定を變更して急にこちらへ歸つて來たのも、あなたのことを思つて、矢も楯もたまらなくなつたからなんです。二年の間、僕はひどい鄕愁に苦しめられ續けてゐました。鄕愁といつたところで、親も無ければ、家はあつても無いも同樣な僕です。僕の鄕愁は唯、あなた一人のためだつた。――僕がどんなにあなたを愛してゐたか、あなたも少しはわかつてゐて呉れたでせう』

靜代は、眼をあげてちらと專一の顏を見た。その眼には、この內氣な娘の、つゝましやかな心の底深くから燃えあがつた情熱が松明のやうにかゞやいてゐた。そしていくらか非難するやうな

表情もそのなかに混つてゐた。

――何故そんなことをお聞きになるんでせう。『少しは』――何故、『少しは』などと仰有るんでせう。私だつて、あなたのことで一ぱいでした、あなたのお歸りを、身も痩せる思ひで待つてゐました――。

彼女の眼は、さう云つてゐた。

『ねえ。靜代さん、あなたは僕の願ひが何であるかを知つてゐる。――僕の願ひをあなたは肯いて下さるでせうか?』

『……』

『え。靜代さん、僕はあなたの御返事をきゝたいのです

『どうしてゞ、ございますの?』

靜代は、聞えるか聞えないくらゐの聲で云つた。

『どうしてつて? それを聞かなければ――』

『だつて、今更――』

『今更?』

『えゝ。今更――』

と、靜代は眞赤になつた顏で、もう一度ちらと專一を見上げて、

『そんな事をおきゝになる事はないぢやございませんか』

『ぢや、靜代さんは承知して下すつたのですね。ありがたう』

專一は、ちよつと頭を下げる眞似をした。

『あら、有りがたうなんて――』

靜代はくるりと專一の方へ背をむけて、袂で顏を押へるやうにした。そして、いつまでも、さうしたなり、此方へ向いては吳れないので、專一は、

『靜代さん』

と云ひながら肩に手をかけた。靜代の肩は、專一の手の下で二つ三つ大きく波打つた。笑つてゐるのか知ら? 專一は、自分もまた笑顏になつて、靜代の顏をのぞき込むと、靜代は笑つてゐるのでは無かつた。彼女は泣いて――かすかにすゝり泣いてゐるのであつた。

『靜代さん。あなたはどうして――』

慰め兼ねた專一は、その小刻みにふるへる肩をいきなりひきよせて、二つの腕の間にその可憐な者を抱きしめてやりたい衝動を辛うじて制へながら、その傍へ立つてゐた。

靜代はやがて泣き止んだ。そして、あちらへ向いたなり、手巾で涙を拭きとつてから、いくらか化粧崩れのした顏で、はづかしげに專一を見上げて、

『御免なさいね』

と詫びた。

『手套が落ちてゐますよ』

專一は身を屈めて、藍色の手套を拾ひ上げた。

『あら、恐れ入ります』

靜代が、それを受取る爲めにさしのばした手を、專一はしつかりと握つて、うなだれた靜代の前髪が彼の顎に觸れるまでぴたりと寄り添うて、

『ぢや、お約束しましたよ』

靜代はうなづいた。靜代の小さな手は、小鳥の心臟のやうに專一の手の中でふるへてゐた。

『どんな事があらうとも――』

と、專一は云つた。

『二人は一生愛し合つて行きませうね。僕たちは、それを八代君の前で、あなたの兄さんの前で誓つたのですよ』

靜代は再び强くうなづいた。彼女の泣いたあとの眼は、一層冴々しく、命を賭けた愛の誓ひの嚴肅なよろこびに、靜かに靜かに燃えてゐた。

貧しい畫家

やがて二人は、墓の前を離れた。

二人は言葉も無く歩いた。――二人の胸は、濃かな愛の思ひで飽和し切つてゐた。來る時と同じやうに二人は沈默勝ちに歩いたが、來る時の沈默は、その裡に、言はうとして言ひ得ぬ悶々しさを潜めてゐた。今の沈默は滿ち足りた爲めの沈默であつた。

二人は、墓地を出はづれて町の方へ出て行つた。

『疲れたでせう。電車で歸りませうか？』

『いゝえ、そんなに疲れは致しません』

『ぢや、鬼子母神の方へ出て見ませうか？』

『えゝ』

二人は互に寄り添ひながら、ゆつくりと歩いていつた。その、誰の眼にも戀人同志としか見えない二人の後姿を欅の幹の蔭からぢつと見送つてゐる二つの眼があつた。二人は、勿論それには氣が附かなかつた。一時間も前に其處ですれちがつたあの佐竹房子が、未だこんなところで、彼等の樣子をうかゞつて居ようなどと、本當に誰が知らう？

欅の蔭に立つて、二人の姿が見えなくなる迄見送つてゐた房子は、へた〳〵としんを抜かれたやうに崩折れかゝつた身體を、辛うじてその幹に支へた。そして、妙にけはしく光る眼で、眼の前の空間を見つめてゐたが、ふと我にかへつたやうに、其處を離れて、專一達の行つたのとは反對の方向に歩き出した。

二十分の後、房子の姿は護國寺前の埃つぽい通りに見られたが、其處から音羽の通りへ曲らうとした歩みをふと止めると、房子は一寸考へるやうにしてから、また元來た方へ踵をめぐらした。そして一町ばかり來ると右手の狹い露地をはいつて行つた。

ごみ箱の上に冬の蠅がもの憂い羽音をたてゝ、踏むとぎしぎしと鳴る溝板が、廂の間に續いた、暗いじめ〳〵としたその露地を十歩ばかり行くと、右手に並んだ長屋建の、同じ樣な格子戸の一つの前に房子は足を止めた。そしてがらりと引明けると、

『三好さん』

と、いきなり呼びかけた。

が、返事が無いので、もう一度、

『三好さん、いらつしやらないの？』

と、、、、りんと響くやうな、やゝ甲を帶びた聲で呼んだ。

のそり〳〵と動いて來る人のけはひがして、引明けられた障子の蔭から、

『やあ』

と云ひながら、此の家の主の三好明が顏を出した。彼は、郵便局の局員の着るやうな黑い毛繻子の仕事着の、それももう褪めてよごれて穴のあいたのを着てゐた。眉の薄い、眼の小さい、色艶わるく痩せこけた何となく印象のはつきりしない顏に、不調和な位見事な西洋人めいた鉤鼻を有つた、見るからおどけた樣子の三十男である。

『やあ、誰かと思つたら佐竹さんですか』

『通りかゝつたから一寸お寄りしてみたのよ』

房子は、笑ひながら云つた。

『あなたが來て呉れるなんて、どういふ風の吹き廻しですかな。まあおあがり下さい』

と、三好は少なからず狼狽した樣子だつた。

『お邪魔してもいゝの。お仕事の邪魔にはならないの?』

『邪魔どころですか、あなたに來て頂けたなんて、まつたく思ひがけない光榮といふものだ。さあさあ——』

房子は、導かれるまゝに玄關のつぎの、居間にも書齋にも工房にもなつてゐる八疊ばかりの部

屋に通つた。部屋は足の踏み場もないまでに取り散らされてゐた。片隅の机には、雜誌や、新聞や、五六冊の書物やが亂雜につみ重ねられ、食パンのかじりかけや、牛乳の空瓶やがそれと一緒にころがつてゐる。畫架にのせられた書きかけの畫板や、繪の具箱や、水差や、調色板や、そんなものが埒も無く彼方の隅此方の隅に押しつけられ、投げ捨てられたなかに、あか染みた毛布をのせた籐椅子ががんばつてゐて、傍の小卓には、ウヰスキイの瓶が安置されてゐる。壁は壁で、むやみにぶら下げられた古洋服や、古袴や、古手拭に幅をされて、二三枚の版畫の額がその間から僅に顏をのぞけてゐる。

『まあ、大變ねえ』

と、云ひながら房子はその美しい眉をひそめた。

『これにでもお掛け下さい。疊の上は埃だらけで坐れません』

云はれるまゝに房子は、その籐椅子に腰をおろして、

『ばあやさん居無いの?』

と、きいた。

『居ないんです』
『どうしたの』
『逃げて了つたんです。米屋や酒屋の催促にせめたてられて、ねたゝまらなくなつたと見えるのです。年がひもない意氣地のない婆さんです』
と、三好は笑つたが、
『だが、今日は何のついでなんです』
『ついで？』
『無論さうでせう。ついででも無けりや、あなたが來て下さるわけが無い』
三好はバットに火をつけながら、やにで黑くなつた前齒を出してにや〳〵と笑つて、
『さうしていらつしやるところを見ると、文字通りはき溜に鶴ですな。いや鶴ぢやない、孔雀ですな。はき溜に孔雀ですな』
『今日何處へ行つたか當てゝごらんなさい』
『さあ、わかりませんね』

『お墓まゐりなのよ。雜司ヶ谷の墓地へお墓參りに行つたんです』
『お墓參りはどうもあなたには調和しませんな。あなたは矢張、劇場とか、音樂會とかでなくちや』
『さうでもないのよ。私、今日お墓の前で泣いて來たの』
『妙ですな。あんたがお墓の前で泣くなんて。一體誰のお墓なんです。あなたにお墓參りをして貰つて、その上泣いてまで貰へるなんて、贅澤な佛樣もあつたもんだな。さういふ事になるんなら、僕も一つ死んで見るかな』
『お生憎さま。あんたなんかのお墓まゐりなんか眞平御免ですわ』
『これは御挨拶だ。——だが、どうかしたんですか？　酷く顏色がお惡いんですよ』
『さう？　そんなに顏色が惡い？』
と、房子は、大粒のダイヤの光る手で、一寸頰を抑へるやうにして、
『その筈です。私、泣いて來たんですもの』
『ところが泣いたやうにや見えませんね。むしろ怒つたやうに見える。——殺氣立つてゐますよ』

『泣いて、而して怒つて來たんだわ』

『何を怒つたんです。――女王樣。何をそのやうに御機嫌をおそこねあそばされましたかな？』

後半を、妙なセリフ廻しで云ひながら、上半身を低く俯向け、肩と平行にさしのばした兩手を水を搔くやうに動かした。

『それ、何の眞似？』

『女王樣のおみ足に接吻のお許しをお願ひ申し上げるところなんです』

貧しい畫家は、細い眼をくるりと圓くした。

『馬鹿ね！　あんたは』

房子はにこりともせずに云つたが、

『三好さん。あなたは都築さんて方御存じ？』

『都築？　あゝ都築專一といふ男ですか？　その男なら、美術學校で二年ばかり一緒でしたよ』

『御存じなのね？』

『えゝ。一寸知つてゐますよ。一時はかなり心易くしたんですがね。實は三十圓ばかり金を借り

ッぱなしにしたんで――それで、一寸具合が惡くなつて、それ以來僕の方から遠ざかッてしまつたんです。三十圓出來たら、返しに行つて、大に舊交を改めようと思つたんですがね。しかし、今は佛蘭西か何處か、外國へ行つてゐる筈です』

『もう歸つて來ましたわ』

『ほう！　歸つて來ましたかね』

『えゝ、歸つて來たわ』

『あなたは、ぢや、都築を御存じなのですか？』

『えゝ、知らない事は無いわ。でも、よくは知らないの。それであなたにおきゝして見たいの。あの人の事に就いて、あなたにおきゝし度い事があるの』

『僕も、あまり知らないんですが――。どういふ事なんですかね？』

三好はあまり興味の無ささうな顏をして、バットの煙をふはり〳〵と吹かし續ける。

『あの方、愛してらッしやる方があるの？』

房子の顏は、その時いくらか赤くなつたやうだつた。流石に女性らしい羞恥の色が瞬間さッと

その美しい顔を掠め去つたやうだつた。が、瞼を強く張られた眼には、はつきりと烏睛が澄んで、所謂、張膽明目の、あくまでも正面を切つた問ひ方だつた。

で、問はれた方で却つて慌てた。三好は、房子の顔を眺めながら、その小さい眼をぱち〳〵と忙しくまばたいたのであつた。

『あなたは御存じない？　あの方には、戀人があるの？』

『さあ――』

と、三好は苦笑して、

『どうも、妙なおたづねですね。さあ――』

『あなたは知らない？』

重ねて問うた房子の語氣は鋭く迫つてゐた。

三好は、一寸考へ込んでゐたが、

『それは――多分、あるでせうね』

『多分？』

『いや、あると斷定しても差支へないのでせうね。何故と云つて、都築はあの通り若いんですからね。若さに戀はつきものです。かういふ僕だつて戀をしてゐます。僕だつて未だ若いんですからね。――だが、僕の戀は何といふみじめな戀なんだ！　クレオパトラに戀した奴隷だつて、一度の接吻は許されてゐる。僕にくらべれば、あのアレキサンドリアの奴隷の方がどんなに幸福だかわからない。僕なんか、奴隷以下だ。あはれなる三好明よ。彼は惜む可き天才だつた。が、失戀は可惜彼の天才を殺してしまつた！』

三好は、妙におどけた調子で、妙なセリフ廻しで、こんな事を云ひ出した。彼の口もとは、その諧謔のために笑つてゐた。が、彼の痩せこけた頰にぴり〳〵と波うつ痙攣や、眉目あたりに搖曳する暗い翳が、欺き難い内心の悲痛で、彼の諧謔を裏切つてゐるやうに見えた。

『何をつまらない事をべら〳〵としやべつてゐるのよ』

房子は、忌々しげに斯うきめつけて、

『そんな事を聞いてゐるのぢや無いわよ。都築さんに戀人があるかどうか？　若しあるなら、どんな人かつて事を、聞いてゐるんですよ。あんた自身の事なんか聞いちや居ないぢやありません

か？』

『どうしてそんな事をお聞きになるんですか？』

『どうしてでもいゝのよ。そんな事をあなたが私に聞く必要は無いのよ！』

房子は、ぱた〳〵と白足袋の尖で疊を蹴るやうにして云つた。

『しかし、僕の知つてゐるのは未だ都築が外國へ出かける前、三年も前の事でしたからね』

『三年前でも、幾年前でもいゝの。その時はあの方に戀人があつたんですの？』

『友達の妹だといふ美しい娘を連れてゐるのを、時々見かけた事がありましたよ』

『お友達の妹？』

『何でもそんなことでしたよ。十五六、いや、十六七だつたかな？　きれいな娘さんでしたよ。帝展で一緒になつて、三人で精養軒で午餐を喰つた事がありますがね。無論、僕がおごられたんですがね』

『然う？　それは何て方か、あなた知つてゐて？』

『さあ、名前なんか忘れちまひました』

『兄さんの、お友達の方つてのは何て方か知つて居らつして？』

『その人にも一度會つた事はあるんだが、何しろ僕は非常な健忘症なんでね、忘れちまひましたよ。何でも、いやに、氣むづかしい男でしたね』

『……』

房子は、じつと見張つた眼を眼の前の空間に据ゑ、強く唇を嚙むやうにしてゐた。

『だが、もう三四年前の事ですよ。それに、果してそれが彼の戀人であつたかどうか？　戀人と稱す可きものであつたかどうか？　それは判りませんからね』

三好は、房子の樣子をおど〳〵とした眼で見やりながら、何か知ら詫びるやうな調子で云つた。

『判らない事があるもんですか？　戀人に決つてるぢやありませんか？』

房子は、叩きつけるやうに云つたが、突然、籐椅子から立ちあがつた。

『お邪魔してね。私失禮してよ！』

立ち上がるや否や斯う云ふや否や部屋を出た。

『ま、まあ、いゝぢやありませんか？』

三好は慌てゝ止めたが、房子は答へ無かつた。呆氣にとられた三好の鼻先で格子戸がぴしりと閉められた。

何あんだ！　といふ顏附で三好はぼんやり立つてゐたが、よろめくやうな足どりで部屋に戻つて、今まで房子が掛けてゐた籐椅子の上に身を投げかけた。そして、苦しげに溜息をふうッと一つ吐いた。

ふと、彼は籐椅子の脚の傍に皺くちやになつた一枚の手巾が落ちてゐるのに氣がついた。彼の眼は輝いた。獲物に飛びつく獵犬のやうな敏捷さで、彼はこれを拾ひあげた。

彼はその手巾を鼻にもつていつた。咽せるやうな、エリオトロオプの芳香の中で、その大きな猶太鼻がぴく〳〵と動いた。

『はてな！　しかし此の匂ひはエリオトロオプだけぢや無いぞ、何だか少し濕つてゐる。涙の匂ひかな？　あの人は墓詣りをして泣いて來たと云つたが、本當に泣いたのかな？　あの人でも泣く事があるのかな？』

貧しい畫家の、惜しむ可き天才を失戀の爲めにだいなしにして了つたと自分で考へてゐる三好

明は、手巾の匂ひをかぎしめながら、こんな事を心の中につぶやいてゐたが、十分ばかりすると、仰向けになつたまゝ、籐椅子の上で眠つてしまつた。手巾が大きな鼻からやせこけた顎にかけて掩うてゐる。そして輕く合せられた瞼の間から押し出された涙の粒が、ちら〳〵と白く光つてゐた——。

ある結婚問題

小日向臺町の家に歸つた房子は、丁度、支度の出來てゐた午餐の卓にも加はらず、傷ついた獸が森の中に走り込むやうに、自分の部屋にはひつた。部屋は洋風の扉と窓とをもつてゐたが、中は疊敷で、一方だけに立てられた紙障子が明るく日を吸つて、障子際の安樂椅子にのせられたクッションの華美な友禪縮緬の色を、紅に紫に陽炎はせてゐた。房子は、たゞ、上着を脱ぎ捨てたゞけで、そのクッションの上に、身體を投げつけるやうにした。

斜めに對ひ合つた壁際の、桃花木の大きな化粧臺は、その前に置かれた花瓶の無雜作に投げ込まれたダリアの影をその鏡面に映し出してゐた。そのダリアの影と重なり合つて、房子の半身が

映し出された。彼女の、すんなりと四肢の伸びた、大柄な身體は、すこし肥り過ぎる位豐かな肉置を有ちながら、しかも、流れるやうな曲線の爲めに嫋かな感じを失はなかつた。瓜實といふにしては、下半部の輪廓がやゝ崩れてはゐたが、その長目な顏は、眼鼻の道具立も一體に大振りで、舞臺顏めく華美な印象的な顏立だつた。眉は濃かつた。鼻は、險しいまでに鼻筋が通つてゐた。やゝ大き過ぎる口もとには、どうかすると野性的な感じが動いたが、眉目のあたりには、むしろ高貴とも云ひ度い打ちあがつた氣品があつた。殊に素晴らしいのはその眼だつた。それ自身で活きてゐる二つの活物のやうな眼は、どんな名優も及ばぬほどの豐富な表情を、牙彫のやうな二重瞼で包んでゐる。ある時は、その長いまつげの蔭に霞を帶びたやうに柔にくもり、ある時は、冴々と冷たい水のやうに澄み、ある時は、うつとりと夢見、ある時は激しく燃え——それは、實に端倪す可からざる眼であつた。彼女の讃美者の一人である或る男は斯う云つた。『あの女の眼の色は、海の色よりも捕へがたい。而して、あの女の眼は、どんなに深い海よりも深い。底に何が潜んでゐるか分らない』と。又、ある男は斯う云つた。『あの女の眼は不思議だ。どんな淫らな娼婦の眼だつて、あの女の眼ほど、強い媚をあらはす事は出來なからう。同時に、どんな女王

の眼だつて、あの女の眼ほど高い驕りを示す事は出來なからう。そして、又、どんな惡魔の眼だつて、あの女の眼ほど、冷酷な色を見せはしない』と。

そして、今は——今は、房子は、突き刺すやうに、その視線を一點にあつめて、ぢつと、考へ込んでゐるのである。

扉のノックの音がした。——房子は、ものうげにその眼をあげた。

『房子』

房子は、その聲をきくと、明かに不快の色を浮べた。そして返事もせずに、もとの姿勢に返つた。

『房子！』

それでもまだ返事をしなかつたので、扉は無斷で引きあけられた。はひつて來たのは、房子の兄の贊之助であつた。

『どうしたんだね。返事もしないで——』

贊之助は、むつつりとした顏附ではひつて來ると、房子の卓の前に置かれた緋の座褥の肘附

椅子を少しうごかして、どつかりとそれに腰をおろした。

彼は、三十二三の立派な青年紳士だつた。母は違つてゐたが、同じ血の流れてゐる證據には、その堂々たる體格と云ひ、くつきりと鮮かな眼鼻立と云ひ、よく房子に似てはゐたが、しかし、房子にくらべると、全體の樣子に、單純で而して低調なところがある。荒い格子縞の洋服にも、大き過ぎる紅玉の飾針にも、又、少し張り氣味の顎にも、何となく下品な感じ、粗野な感じがあつた。

『房子、いやに考へ込んでゐるぢや無いか』

執拗に沈默を守つて居る房子を、しばらくの間眺めてゐたが、たまらなくなつた樣にして贊之助はかう云ひかけた。

それでも房子は默つてゐた。

『何を考へてゐるんだい？』

『考へてゐるのよ。後生だからあつちへ行つてゐて下さいな』

『お前はこの間約束した事を忘れやしまいね。あれから丁度一週間たつたぜ。今日は返事をきく

日だぜ』

『返事つて何の返事』

『とぼけちやいけないぜ。あれ程約束したといつたのに』

『どんな約束だつたかしら？』

房子はあちらを向いたまゝで云つた。

『それを忘れたのか』

贊之助の聲は怒氣を含んでゐた。

『忘れたわ』

房子は平氣な顏で云つた。

贊之助は、こみ上げて來る怒をおさへるやうにして、すかすやうな口調になつて、

『ねえ、房子。僕はなにも自分の利害の爲めに、お前に云つてゐるんぢやないんだ。お前自身にとつても、こんな結構な緣談はないぢやないか、お父さんだつてどんなにそれを望んでいらつしやるのか知れないのだ　おれはお前の幸福の爲めに勸めてゐるんだ』

『私の幸福の爲めに？』

と、房子は嘲るやうに云つた。

『私の幸福は、私だけが知つてゐるんです。餘計なお世話といふものですわ』

『お前はえこぢになつてゐるんだね』

『あなた方があんまり、我儘すぎるんです。我儘もいゝけれど、何故もつと正直に云つて下さらないんです。賴むからおれの爲めにお前の身體を賣つて呉れと』

『賣るんだつて？』

『さうぢやありませんか。あなたやお父さんは、御自分達の御都合で、私を賣らうとしてゐるんぢやありませんか』

『どうしてお前はそんなひねくれた云ひ方をするんだらうなあ』

『ほゝゝ』

と、房子はヒステリツクに笑つた。

『一體いくらでお賣りになるつもりなの、私の身代金はどの位なの？』

房子はさう云つて、刄物のやうにかゞやく眼で、切りつけるやうに贊之助の顏を見た。

日本の女

『身の代金だつて？　馬鹿な？』

贊之助は腹立たしげに叫んだが、

『どうしてお前は、そんなこひねくれた物の云ひ方をするんだらうなぁ！』

と、あとは、稍ゝ嘆くやうに云つた。

『だつてそれに違ひ無いぢやありませんか？』

房子はにつこりともせずに、

『尤も、あなた方の出やう一つで、甘んじて犧牲になつてあげる氣になるかも知れませんけど——そんなお爲ごかしのおすゝめは、まあ御免蒙り度いわね』

と、嘯くやうに云つた。

『犧牲だつて？』

『さうぢやありませんか？　何故正直に然う仰有らないの？　お父様にしろ兄様にしろ、御自分たちの都合から私の身體を利用なさらうとしながら、お前の爲めだの、お前の幸福の爲めだのつて、いやにお爲ごかしに仰有るから私癪なのよ』

『そ、それはお前の邪推だよ。決して、自分達の都合でばかり、此の結婚を勸めてゐるんぢや無いんだ』

『自分達の都合でばかり？――そろ〳〵本音をお出しになつたわね。自分達の都合でばかりすすめるのぢやない、と同時に、お前の爲めにばかりすゝめてゐるのぢやない――と、序にさう白狀なすつたら如何？』

『さう、皮肉に釋つちや困るな。どうも――』

『もうすこし、貧乏が酷くなつてゐたら、私、お女郎か何かに賣られてしまつたかも知れないわね。お女郎に賣りながらでも、自分達の都合で賣るのぢやない、お前の爲だなんて仰有るか知ら？』

『何を馬鹿な事ばかり云ふのだ？』

贊之助は苦笑しながら云つた。

『だつて、然うぢやありませんか？』

房子は、叩きつけるやうに云つた。

『然うひねくれられちやあ、どうも、手の附けやうが無いよ』

『だから、何故、正直に、どうぞ犧牲になつて呉れと仰有らないんです。お前があの男のところへ嫁つて呉れれば、あの男の爲めに、自分達は浮びあがる事が出來るのだから――と、さう正直に打明け話をして下さらないんです。さうして下さりや、私だつて、眼をつぶつて、あの男へ嫁く氣になるかも知れないわ。私にだつて、古い日本の女の血が通つてゐるのよ。親兄弟の爲めに身を献げて、健氣な犧牲的精神の女らしいヒロイズムに涙を流す――といふやうな、そんな氣持にならないものでも無いのよ。でも、兄さんやお父様のやうに口先でうまくまるめて了はうとなさるんぢや、まあ、御免を蒙つて置いた方が宜ささうだわね』

『お前は、そんなにあの人が氣に入らないのかな。――百萬長者の後とり息子で、人柄から云つたつて別に非の打ち處は無いし、その上、あの通りお前に夢中になつてゐるんぢや無いか？　あ

れだけの男に此の位思はれりや――』

『女の果報だと仰有るんでせう。それを斷つたりしちや冥利に盡きると、ねゝほゝゝ、昨晩もお父様からいやといふ程御説法を承はつたわ』

『だが、本當に然うぢやあ無いか？』

『あなた方からお考へになつたら、成程、然うかも知れませんけどね』

『どうして、あの男がそんなに氣に入らないのかな？　あの男は立派な男なんだが――』

贊之助は、獨語めく調子で云つた。

『立派な男？　立派な男と云ふより立派な牡牛と云つた方が宜ささうだわ』

『房子！　お前は何人か愛してゐる男でもあるのかい？』

『何故、そんな事を仰有るの？』

房子の顏には、その時稍ゝ混亂の表情が動いた。

『だつて可笑しいぢや無いか？　外に戀人でも無けりやあ――』

『ほゝゝ、あるかも知れないわね』

『それは一體何人なのだ？』

『當てゝ御覽なさい』

『そんな事がわかるもんか』

贊之助は忌々しげに云つた。

『私にもわからないのよ。ほゝゝ』

贊之助は何か云はうとしたが、そのまゝ、口を噤んだので、房子も、それぎり口を利かなかつた。而して、贊之助の存在とは全く無關心のやうに、その方には背を向けて、眼を窓外の青空に放つてゐた。

贊之助は、寧ろ憎惡を含んだ眼附で、彼女の、滑かに白く彈力を帶びた、硬質陶器のやうな感じのする頸筋のあたりを見つめながら、紙卷の口を嚙んでゐたが、その時、女中がはひつて來て、

『若旦那様。榛澤さんがいらッしやいました』

と告げた。

『榛澤さん？　客間の方へお通ししといて呉れ』

贊之助はさう答へて置いてから、

『房子。あゝして熱心にやつて來るんだよ。今日は、せめて挨拶にだけでも出て呉れたらどうだ？』

榛澤といふのは、龍彦の姓であつた。專一は、龍彦の弟として、榛澤家の一員ではあつたが、事情あつて、母方の姓の都築を名乘つてゐるのであつた。

房子は、それには答へず、美しい眉をぴり〳〵と動かした。

『ね。一寸でいゝんだから』

『私、今日は頭痛がするのよ』

『頭痛がする？　別にそんな樣子も見えないぢやあ無いか？』

『でも、今日は氣持が惡いのよ。失禮させて頂きますわ』

『そんな事を云はないで――一寸でいゝんだよ』

贊之助は哀願するやうに、下手に出て云つた。

『氣が向いたらまゐります』

房子は、早く贊之助に出て行つて貰ひ度かつたので、斯う簡單に云つた。

『ぢやあ、賴むよ』

『氣が向いたら――』

と、房子はうるささうに、

『ですけど、兄さん、あまり氣早な取引はなさいますなよ。あとでお困りになるやうな――』

房子は嘲りを含んだ大きな眼で贊之助の顏を眞面に見上げながら云つた。

『取引だつて？』

『えゝ。――もう、手金ぐらゐ、おとりになつたんぢやない？』

『手金だつて？』

『私は品物ぢや無いんですからね』

『何を云つてゐるんだ！』

贊之助は腹立たしげに云つて扉口の方へ出て行つたが、そこで又、振返つて、

『ぢやあね、房子。一寸でいゝんだから顔だけ出してお呉れ』

と、賴むやうに云つて出て行つた。

贊之助が出て行つたあと、房子は、そのまゝの姿勢でぼんやりとしてゐたが、やがて、化粧臺の前の、書物卓の方に座を移すと、卓の上に一枚の書簡箋を展べた。そして、軸の細い金の飾りのついた萬年筆を尖細の指の間にとりあげた。

(先ほどは、失禮致しました)

先づさう書いた。あとが續かなかつた。彼女は、萬年筆の軸の端で、輕く顎のあたりを叩くやうにしながら、眼を、眼の前の一點に凝らした。

(お歸りになつた事とは少しも知らず、突然、お目にかゝり、本當に驚きました)

その次に、兎に角是れだけ書いた。そして、はじめから讀みかへして見た。

まあ、何て氣の利かない書き方だらう? まるで小學校の生徒の作文見たいだわ! かう呟くと、書いた文字の上に、强くペン先端を押しつけて、幾筋もの太い棒を引いた。而して、また、眼を空に据ゑて、何かじつと考へ込むやうにしてゐたが、再びペンをとりあげると、抹殺したあ

との餘白に、

(都築專一)

と書いて見た。

(都築專一)

(都築專一)

(都築——)

いくつも〳〵同じ四つの文字を書き列ねたが、更に、紙の上部の餘白のところへ、

(Vampire)

と書いた。

(Vampire)

(Vampire)

凡そ十ばかりも、その同じ文字を書いたと思ふと、今度は、紙の全部に斜に太い線を引いた。

それと對角線にもう一本太い線を引いた。ペンは縱横に紙の上を走つた。その一枚の書簡箋はと

うとう眞黑になつてしまつた。――房子は、ペンを投げ出すと、ほつと溜息を吐いたが、やがて強く唇が嚙み締められ、口もとには冷笑に似た表情が浮べられた。

使者

房子が、三好明の許へ再び訪ねて行つたのは、一日おいて次の日であつた。

入口に立つて案内を乞うたが、ひつそりと靜まりかへつて返事も無かつた。

留守かしら？　と思つたが、格子戸も半ば開いたなり、土間には下駄もぬぎ捨てられてあつたので、房子は、思ひ切つて上つて行つて見た。玄關の次の襖を開けて、例の工房兼書齋の一間へはいつて見ると、此の家の主人なる貧しい畫家は、籐椅子の上の古毛布に埋もれて晝寢をしてゐるのであつた。

『まあ！』

と房子は、苦笑して、

『三好さん、三好さん』

二聲ばかり呼んで見たが、彼はなか〳〵眼を覺まさなかつた。あんぐりと口を開けて、薄い眉毛の邊を押し皺めた其の寢顏には、あのおどけた表情の影もなく、暗い陰慘な感じがまつはつてゐた。喘ぐやうな呼吸も、ひどく苦しげであつた。

『三好さん』

と、房子は肩に手を掛けて、輕く突き動かすやうにした。と、三好は、やうやく眼をひらいたが、

『お〳〵』

と、一聲低く呻めいたなり、半ば夢にさまよふやうな眼附を眼近に微笑してゐる房子の顏に凝らした。

『ほ〳〵。眠つてゐたの。呑氣ねえ』

『やあ、房子さんですか』

『え〳〵、私よ』

と、房子は笑つて、

『何をそんなぼんやりした顔をしてゐらつしやるのよ』
『夢ぢやないかと思つてゐるんですよ。丁度今、あなたの夢を見て居た處なんです。で、夢の續きぢや無いかと――』
三好は、房子の顔をまじ〳〵と見詰めながら云つた。
『馬鹿ねえ、あなたは。起きてしつかり眼をお覺ましなさいな』
云はれて三好は起きあがつた。
『本當に呑氣ねえ、晝寢などをして居て』
『どうも神經衰弱でね、夜寢れないものだから』
『どうして眠れないの』
『神經衰弱なんですよ』
『どうして、神經衰弱になんぞなつたの？　あなたの樣な呑氣者が』
『どうして！　これでちつとも呑氣なんぢや無いんですがね』
『さう？　あんたでも何か苦勞がおありになるの？』

『それはありますさ』
『どんな苦勞？』
『あなたには解らないんですかなあ』
『解らないわねえ』
『なさけないですなあ！』
『どうしてなさけ無いの？』
『どうしてと云つて――』
と、三好は、その細い眼をぱち〳〵と瞬いたが、
『房子さん』
斯う呼びかけて、
『僕は、苦しんでゐるんですよ』
『へえ？　何を――』
『僕は戀をしてゐるんですよ』

『然う？　滑稽ねえ』

房子は、笑はうとした。が、對手の、おどけた顏附にも、妙に切迫つまつた眞劍な色が動いてゐるのを見ると笑へなくなつた。――本當にそれは妙な顏だつた。口もとでも、頰でも、眼尻の皺でも、他の部分は皆例のおどけた笑ひを示してゐるのに眼だけは、迫るやうな思ひつめたやうな、一生懸命な表情できら〳〵と輝いてゐた。

『僕が、何人を戀してゐるか？　あなたにはわからないんですか？』

『わからないわ』

『房子さん。あなたですよ。僕は長い間あなたを戀してゐるんです。――あなたは、僕が命懸けで戀してゐるのに、僕の戀を認めてさへ呉れないんです。せめて認めてだけは呉れてもいゝぢやありませんか？　僕の愛を受け入れて下さいなどとは云ひませんよ。唯、僕が、どんなにあなたを愛してゐるか？　此の心持だけは知つて頂き度いのですよ。認めて頂き度いのですよ。此の通り、僕は此頃ではすつかり病人なんです』

三好は、皺嗄れたやうな聲で云ひ續けた。

『だから、かうしてお見舞に來てあげたんぢやありませんか？』

と、房子は、稍〻無氣味になつて來た氣持を、強ひて冗談に紛らすやうに云つた。

『房子さん。本當にあなたは、僕の爲めに來て下すつたんですか？』

『あなたに用があつておうかゞひしたのよ。――だけど、そんな冗談は止めて頂戴。まあ、へんな眼附をして――私、そんな道化芝居のお相手になつてはゐられないわ』

『道化芝居だつて？』

『あなたは本當に剽輕者ね』

『あゝ、駄目だ』

三好は兩手で頭を抱へて、再び籐椅子の上に倒れて、

『矢張、本當にはして貰へないんだ！　おれは、矢張道化役者としてしか取扱はれないんだ。あゝ、呪はれたる男よ！　彼は死を以て彼女を愛した。しかも、彼女は彼の愛の告白を道化芝居だといふ――。あゝ――』

三好は、大袈裟に呻き聲をあげた。彼の眼には涙が浮んでゐた。その涙が何で道化芝居だら

う？　だが、彼の表現は、何時の間にか、例のおどけ役者のそれに化つてゐた。かうなると、彼には、自分自身ですら、それが道化だか眞劍だかわからなくなるのであつた。

『いゝかげんになさいよ！　三好さん！』

と、房子はきめつけて、

『私、眞面目にあなたにお頼みし度い事があつてうかゞつたのよ』

『僕だつて眞面目なんですがね』

三好は起きあがつた。そして、てれ臭さうな笑ひ顏をした。

『お頼みがあるのよ。肯いて呉れて？』

『女王様の仰せに背く奴隷はありますまいよ。――一體、此の奴隷奴に改めてお頼みと仰せられますのは――』

三好は、又、妙なセリフめいた言葉で云つた。

『別に六かしい事では無いのよ』

『どんな事ですかな？　たとひ、どんなむつかしい事でも、此の奴隷奴の力で及びます事なら

ば――』

『眞面目におねがひしてゐるのよ』

『眞面目に承つて居るのですよ』

『あの、都築さんね。あなたはよく知つてゐると云つてたわね』

房子は少し赤くなつて早口に云つた。

『一昨日お話した通り、あの男は僕の舊友ですよ』

『私、あの人に會ひ度いのよ』

『はあ？』

三好は、やゝ面を正して、その眼で次の言葉を促した。

『是非、あの方にお會ひし度い事があるの。で、一寸でいゝんですから、あの方にお目にかゝる事が出來るやうに、あなたに機會をつくつて頂き度いの』

『そんな事は譯は無いんですがね。――だが、どうしてあの男にお會ひになり度いんですかな？』

『それを、あなたに云ふ必要は無いわ』

『ですが――』

『そんな事をうるさくお訊きになるんだつたら、あなたには頼まないわ』

房子は腹立たしく云つた。

『さう、氣短かに腹をお立てになつては困りますな。――だが、どうも氣になるですな』

『何が氣になるの？――あの方は會つて呉れないでせうか？』

『あなたに會ひ度いと云はれて、それを拒むやうな馬鹿者は全世界の男の中に無いでせうよ。無論、彼奴有頂天になつて飛んで來るでせうよ。――だが、あの男に何の御用なのでせうな？』

『それを聞くんならお頼みし無いと今云つたばかりです』

『だが、どうも、へんだな？』

『何が、へんなの？』

房子は突ッかゝるやうな調子で云つたが、彼女の顏は又ぱッと赤くなつた。物に動じない房子が、そんなに顏を赤くしたりするのは不思議と云つてもいゝ現象だつた。三好は、ぢつとその房子の樣子を打ちまもつてゐたが、

『房子さん、おやあ、あなたはあの男を愛してでもゐるんですか？』

『何を馬鹿な事を仰有るの？』

房子は叩きつけるやうに云つたが、彼女の顏は、大火を映した空のやうに燃え立つた。

『馬鹿な事ですかな？――なるほど、あなたが進んで人を愛するなんて事は考へられないですな。あなたは愛せられる人で、愛する人では無いんだから――』

と、三好は獨りで合點して、

『それにしても、都築の奴は幸福な奴だな。女王樣のお召出に預るなんて――いや、實に羨む可き男だ』

『ぢや、私の頼みを肯いて下さるわね』

と、房子は軈て顏色を元に戻して、

『でも、どうしてその機會を作つて下さるおつもり？』

『さうですな。――あの男に此家に來て貰つて、こゝで會ふやうにしますかな？　然しこゝぢやあまり殺風景かな？――いや、僕が引張り出して、一緒にあなたのお宅へうかゞひませうか？』

『然うね。それもいゝけど、來て下さるか知ら？』
『大よろこびで飛んで行きますよ』
『なる可く、わざとらしくなく、自然にそんな工合になつたやうにして頂き度いのよ』
『あなたが、會ひ度いと云つていらッしやる――さう云つちやいけないんですか？』
『さうねえ』
と、房子は考へ込むやうにして、
『いゝわ。はつきりと然う云つて下すつて構はないわ。外國のお話などうかゞひ度いからお茶にでもいらしつて下さいつて――さう、云つて下さいな』
『然う云ひませう。而して、彼の男と一緒にうかゞひませう。彼の男と一緒に――僕もうかゞつてもいゝんでせうかな？』
『さうね。――あなたはどうでもいゝのよ』
『どうでもいゝ？　ぢや、僕は呼び出しの使ひだけなんですか？　助からないなあ！』
と三好は一寸頭を搔く眞似をして、

『仕方が無い。承知しました。で、何時が宜いんでせうかな？』
『いつでも御都合のいゝ時に――でも、なるたけ早い方がいゝの？　今晩でも、構はないのよ』
『今晩？　馬鹿に急なんですね』
『えゝ。出來るだけ、早く行つてお賴みして頂戴』
『ぢや、すぐ行きませう。だが、都築は本當に歸つて來てゐるんですか？』
『一昨日、お目にかゝつたんですもの。間違ひなく歸つて來ていらッしやるわ』
『斯うッと、都築の家は、たしか、麴町でしたね。榛澤といふ邸だつたな』
三好は獨言めく調子で云つた。
『さうですわ』
『ぢや、兎に角、これから出かけて見ませうかな？』
『さうして下さいな』
『久しく會はないで工合が惡いんだが……それにあの男には借金もあるんだが――』
と、三好は立ちあがつて、古びた外套をひつかけながら、

『だが、どうも妙な役目を仰せつかつたものですな。――一體、あの男にどんな用がおありになるんですかな』

どうも氣にかゝるといふ風にして、もう一度繰返した。

『また、そんな事！』

房子は顏を赤めて睨むやうにしたが、三好がもう少し鋭敏な觀察者であつたならば、彼は、今日の房子の何時になくそはそはした、耻ぢ深い樣子の中に、弱々しい女の魂が、咲いたばかりの花のやうにふるへてゐる事を看て取つたであらう。

或る會見

悲みに沈んでゐた八代の一家は、專一の歸來によつて明るくされた。專一は、毎日午後になると日課のやうに訪ねて來た。而して、老いた母を慰め、相許した戀人の愛撫を以て靜代を勇氣づける事を忘らなかつた。八代の家は、靜代の父は譽ある學徒ではあつたが、それだけに物質には緣の無い方だつたので、遺產といつては何程も無かつた。その、何程も無かつた遺產も英吉の學

資や何かでもう殆ど盡きてゐたので、一家は今や生活の危機に直面してゐた。專一は、父の家を出て、此の人達の爲めに働かうと決心した。未だ定名を得ない畫家として、その藝術を金に代へる事はむづかしいが、父に請へば幾何かの財は分けて呉れるであらう。專一は一切を父に告げて家を出る氣だつた。が、歸る早々ではあり、それに父が果して快く許しを與へて呉れるかどうかもわからないので、一寸切り出しにくいのであつた。

その日、專一が訪ねて行くと、靜代は亡兄の書齋の椅子に凭れて、編物をしてゐた。風邪氣と見えて、髪をくる〳〵卷にし、咽喉に白い布を捲いて、いくらか青褪めた顏をしてゐたが、それが却つて彼女の美しさを、例へば可憐美とも云ふ可き美しさを深めてゐた。

『靜代さん。面白い事があるんですよ』

專一は靜代の顏を見るなり云つた。

『何ですの？』

『H・S――彼女がね、僕に會ひ度いといふのですよ』

專一は笑ひながら云つた。

『あの、佐竹房子といふ人でございますか？』

『えゝ、昨夕、僕の昔の友人の三好つて男が突然訪ねて來たんです。その男はあの女の知合だといふんですがね、外國の話を聞き度いから、遊びに來て呉れつて云ふあの女の傳言を僕にもつて來たんですよ』

『まあ！』

と、靜代は物惑はしげな眼で、じつと相手の顏を眺めて、

『それであなたはいらつしやるおつもり？』

『行くつもりです。——英吉君を悶死させたあの憎む可き妖婦！　せめて思ひ切り面罵してやらうと思ふんです』

が、靜代は何故かそれには答へないで、力無げに項を落した。

『いつか機會が來るのを待つてゐたんです。思ひ掛けなくも早くそれが來た。僕は、英吉君の日記をあの女に讀ませてやります。而して、出來るなら、あの女の横面の一つ二つ張り倒してやらうと思ふんです』

專一は氣負ひ込んだ調子で云つた。——かたきを打つてやり度い、一言恨みだけも云つてやり度いと靜代も云つてゐた。だから、靜代も必ず此の機會を喜んで呉れる事と專一は豫期してゐたのに、靜代の態度は案外だつた。靜代は、矢張默つたまゝぢつと專一の顏を見上げた。その眼は不安と憂惧とにをのゝいてゐた。

『はゝゝ。まさかそんな亂暴も出來まいが、兎に角思ひ切り懲らしめてやらなければ——。僕はあの英吉君の魂が今僕の胸に活き返つて、憤りの呻きを擧げてゐるやうな氣がするのです。僕はこれを有つて來ました』

と、專一は衣嚢から袱紗につゝんだ亡友の日記を取り出して、

『僕の口は、死んだ英吉君の代りに叫ぶでせう。一つ痛快に、あの女をやつつけてやりますよ』

『ですけど——』

と靜代は漸く口を開いて、

『あの人は、何の爲めにあなたを呼んだりするのでせう』

『さあ、それは——あの女らしい氣紛れからだと思ひます』

『その氣紛れが怖いのよ。――矢張いらつしやらない方がいゝわ』

『行かない方がいゝ？』

『えゝ。いらつしやらない方がいゝのよ。あの人は怖い人ですわ。あの人は、兄さんをあんなに滅茶々々にして了つた人ですわ。あの人は怖しい魔女に違ひないわ。危險ですわ。近寄らない方がいゝのよ』

『はゝゝ。靜代さんは、ぢや、僕があの女の爲めに、英吉君の二の舞でもしやしないかと、それを不安に思つてゐるんですか？　何といふ馬鹿氣た心配をしたものだらうね』

と、專一は笑つて、

『大丈夫ですよ。僕は英吉君とは違ひますから――』

『あなたが兄のやうに弱い方で無いといふ事は私も信じて居りますわ。ですけど――』

『僕がどんなに弱い男であつたにしろ、僕には愛する人がある。あなたといふ人がある。愛が僕を強くしてゐる。あの女がどんな魔女にしろ、僕があの女などに惑はされるもんですか？』

『それは私だつて信じて居ますけど――でも――』

靜代は、雜司ヶ谷の墓地で一瞥した佐竹房子の花やかな姿を目に描きながら、心許無げに云ふのであつた。

『矢張不安だといふんですね。そんな風に靜代さんに云はれると、意地になつても――僕の愛の强さをあなたの前に證據立てる、その爲めばかりにも、是非あの女に會はずにはゐられませんよ。なあに、大丈夫ですよ。僕にして見れば、こんなつまらん事を心配するあなたの氣持が少し心外ですね』

『然うでせうか？』

『然うですとも』

靜代はそれ以上爭ふ事は出來無かつた。で、專一が、房子の許に行く事を承諾しないわけには行かなかつた。

明日午後三時頃からお伺ひします。實は、僕も、是非お眼にかゝり度いと思つてゐたのです。

――さういふ專一からの返事を三好から傳へられた時、房子の胸は躍つた。房子は、その日は朝

から妙に落着かなかつた。午前の中に入浴をすまして、念入りに化粧をして、午餐の食堂にも出て行かずに、約束の午後三時を待遠しく待ち續けた。

『案の通り、先生喜んでゐましたよ。今晩にも一緒にと云へば來たかも知れませんがね。――いや、全くあの男は有頂天になつて居ましたよ』

三好は然う云つてゐた。而して、あの男も亦あなたの讃美者であるに違ひ無いなどと云つてゐたが、そんな事はあの三好の出鱈目に過ぎないにしろ、あの人の方でも自分に會ふ事を望んでゐたといふのは本當であらうか？

あの人も自分に會ひ度いと思つてゐた？――何の爲めに？　と考へて見た時、彼女は、あの八代英吉の事を思ひ出した。專一が英吉の友人である事は房子も知つてゐた。その點で、房子は酷く不安だつた。あの人も矢張、私を誤解してゐるのぢや無いのか知ら？

だが、會ひさへすれば、會つて種々と話しさへすれば。――

房子の心は、唯專一に會へるといふ此の一つの事實に躍つた。――長い長い間、ひそかに思ひつゞけてゐたあの人と、今日會ふ事が出來るのだ！

あの人には戀人がある。――自分の望みは恐らくはかなはないであらう？　叶はない迄も、此の心だけは打ち明け度い。長い間一人の胸に秘めて置いた此の戀心をだけでも、せめて、あの人に告げ度い。聞くだけでいゝから聞いて貰ひ度い。――

そんな事を思ひ續けてゐる房子の樣子はいつもの房子とはまるで別人だつた。彼女の心には、初めて彼を見た五六年前の、十六の娘の初戀そのまゝの純な悲みとあこがれとがよみがへつてゐるのであつた。

女中がはひつて來た。

『お孃樣。此方がお見えになりました』

女中がさし出す名刺を受取らうとする房子の手は目に附く程ふるへた。とう〳〵いらしつたわ！　彼女の胸は聲を擧げて騷ぎ出したのであつた。

が、受取つた名刺を一目見た時、その名刺は、彼女の指先から辷り落ちて了つた。さツと血の退いた彼女の頰は彫像のやうに硬ばり、濃い眉がぴりゝと動くと、腹立たしげな聲が女中に投げつけられた。

『居ると云つたの？』

『はい――』

女中は、房子の顏色に狼狽しながら答へた。

『仕方が無いねえ』

房子は舌打をして、

『お氣の毒で御座いますが、風邪を引いて臥つて居りますから、今日は失禮致します――と、然う申しあげておくれ』

女中は逃げるやうに出て行つたが、やがて戻つて來た時は、手に小さな角封をもつてゐた。女中は、おそる〳〵それを房子に出して、

『あの、これをさしあげて呉れと仰有つてお歸りになりました。明晩あちらでお待ち申し上げますからと仰有つてゞ御座います』

『うるさい人！』

房子はもう一度眉を抑顰めて、ものうげな手附でその角封を開いて見た。それが、帝國ホテル

で催される或る音樂會の招待券である事を、輕蔑するやうな眼附で看て取ると、ぴり〳〵と三つ四つに裂いて力一ぱい床の上に叩きつけた。ついでに、そこに落ちてゐる名刺を拾ひあげると、それも引裂いて叩きつけた。――それは清川男爵の次男で、素人提琴家として一寸評判の、而して、彼女の求愛者の一人であるところの清川規矩男の名刺だつた。

卓の上の置時計が一つ打つた。見ると、三時半だつた。

來ないのか知ら？　あのろくで無しの油畫書きがい〻加減の報告をしたのぢや無いか知ら？

――房子は坐ても起つても居られぬ程苛立たしくなつて來た。彼女は、ピアノの蓋をあけてめちやくちやに鍵盤を叩いて見たり、トランプの札を出して獨占をやつて見たりした。

二度目にはひつて來た女中が、間違ひ無く都築專一の來訪を彼女に傳へたのは、それから二三十分經つて、もう少しで四時が打たうとする時分になつてからであつた。

彼の心彼女の心

いさといふ時になると、我ながら意氣地も無く、房子は躊躇した。そこに彼が待つてゐる筈の

應接室の把手に手を掛けたなり、房子はしばらく立ちすくんでゐた。

心臟よ！　もう少し鼓動を鎭めてお呉れ！　胸よ！　どうしてそんなに騷ぐのか？

何時まで然うしても居られなかつた。彼女は思ひ切つて扉を明けた。

『いらつしやいませ』

しかし、中にはひつて、彼女が中にはひると同時に椅子から立ちあがつた專一の顏と眞面に顏を見合せた時は、その鍛はれた社交的の習慣と、且つ反抗的な勇氣とを以て、房子は、もう心の混亂を征服してゐた。

『お待たせ致しました。本當によくいらしつて下さいました』

彼女は、格別、惡びれる事もなく斯う續けた。

專一は、屹と見迎へるやうにしてから、

『やあ！』

と無器用に頭を下げた。

『先日は失禮致しました。あなたがお歸りになつた事とは些とも存じませんでしたから、本當に

びつくり致しましたわ』

『急に歸つたものですから——』

專一はぶすりと云つた。

『あちらへいらツしやる時は、私丁度病氣で臥つて居りましたものですから、お見送りも出來ないで、どんなに殘念だつたか知れません。實は、禁められるのを押し切つて、看護婦に附き添はれて自動車に乘つて出かけたのでございますけど、途中で工合が惡くなつたので、東京驛のすぐ近くまで行つて引返してしまつたので御座いました。とう〳〵お別れの御挨拶もしないで、あとで泣くほど口惜しう御座いましたわ』

『さうですか？　それは——』

專一は冷然として云つた。專一は、そんな事があつたとは信じられなかつた。それ程親しい仲でも無かつた房子が、そんなに別れを惜んで呉れたらうとはどうしても考へられなかつた。これだ、この調子なのだ——と、專一は心の中に呟いた。

『あちらへいらしつてからもお消息一つ下さらないし——それ程お親しくして頂けた身でも無い

とは思ひながら、私、何だか淋しう御座いました』

房子は淋しく笑つて見せた。

『つい、忙しかつたもんですから、何方へもすつかり御無沙汰をしちまひました』

専一は切つて落すやうに云つた。

『三年ぐらゐの御豫定だと承はつて居りましたから、未だゝとばかり存じて居りましたが――』

『えゝ。急に歸り度くなつて歸つて來ました』

専一は、早速、友の横死について切り出す可きだと思つた。――衣嚢に突込まれた彼の片手には、英吉の日記がひしと摑まれてゐた。これを見給へ！　さう云つて、その日記を彼女に叩きつけなければならない。さう思ひながら、彼の心は妙に鈍つた。彼は、その情熱的に輝く二つの大きな眼に、我知らず牽き寄せられて行く自分をそこに感じた。精巧な牙彫のやうな二重瞼に包まれて、長い睫毛の蔭から、じつと見つめる二つの眼――何といふ不思議な魅力をもつたその眼であらう。彼は、深淵のやうなその深い眼の中に思はずふら〳〵と引き込まれさうになる自分をそこに感じた。いけない、用心しなければ――彼は、心の中に叫んだ。

『お歸りになつた方が宜しう御座いますわ。どんなにか、待ち焦がれてゐる方がおありになつたでせうにねえ』

『いや、そんな者は無いんですが――』

『あら、お隱しなさらなくても宜しう御座いますわ』

『……』

専一は、すこし赤くなつた。その淺黑い頰に聊かの羞恥を見せた専一の、男性的なきりゝとした顏がその時どんなに好ましいものに房子の眼に映つたか？　房子は、同時に、此間、雜司ヶ谷の墓地で見た一つの情景を――あの、胸が煮えくりかへるやうな情景を思ひ浮べた。彼女の眼は言葉には打出す事の出來ない恨みの思ひで燃えた。恥ぢと、恨みと、而して言はうとして言ふ事の出事ない悶々しさと――それ等の感情のために、稍ゝ涙ぐみさへして、眼もとのあたりを仄かに赤らめた房子の顏は一層のなまめきを帶びて、打ちがたく魅力的だつた。――専一は、それを見まいとするやうに面を卓に伏せた。而して、畜生！　負けるものかと心に叫んだ。

『でも、あんなところでお目にかゝるなんて――私、全く夢のやうな氣が致しました。お墓まゐ

りにいらしつたので御座いますか？』
『然うです。八代のお墓まゐりに行つたんです』
勇氣を振り起しながら、專一は面をあげて屹と房子の顏を見た。而して、
『佐竹さん。八代は死にましたねえ』
と云つた。
『本當に、あの方はお氣の毒で御座います』
房子は嘆息するやうに云つた。
『佐竹さん！　あなたは、八代がどうして死んだか御存じないですか？』
『肺炎とか承はりましたが――』
『世間にはさう云つてあります。けれども、本當は、八代は病氣で死んだのぢや無いのです』
『病氣で死んだのぢや無いつて、ぢや、どうなすつたので御座います』
房子は、惑はし氣に訊いた。
『自殺したのです』

『え、自殺』
『さうです。自殺したのです』
『まあ、それは本當で御座いますか？』
『そんな事にどうしてうそが云へますか？』
『どうして――自殺なぞを――』
房子は、極度の驚きから、辛うじて自ら支へながら云つた。
『どうしてとお聞きになるのですか？　――あなたは、自分で殺して置きながら、どうして死んだのかとお訊きになるんですか？』
『自分で殺して――？　私には、仰有る事がわかりません』
『佐竹さん。あなたはとぼけてゐるんですね』
專一は、憤りの爲めにわな〻きながら云つた。矢は弦を離れた。專一は、やうやく、その憤りに自分の全部を委ねる事が出來た。
『どうして八代が自殺したか？　あなたに覺えがある筈です』

『まあ！』

『これを見て下さい』

専一は、衣嚢から英吉の日記をとり出した。そして、それを房子の前に置いた。

『これは何で御座います？』

『八代がどんなに苦しんだか？　あのかはいさうな男が、一人の妖婦の爲めに、どんなにみじめに弄ばれたか？　八代が自分でそれを書いてゐるのです。僕は、あなたからお招きが無くてもこれを見て頂く爲めに、是非あなたにお目にかゝるつもりでゐたのです』

『……』

『佐竹さん。あの男を自殺させたのはあなたですよ。あの男の下手人はあなたなんです。この日記を讀んで御覽なさい。いや、是非、あなたに讀んで頂かなけりやならないのです』

房子は、じつとうなだれたまゝ、しばらくの間押黙つてゐたが、

『あなたは誤解していらつしやいます。都築さん』

と、靜かな、悲みを含んだ聲で云つた。

『何が誤解です。事實が證據立てゝゐるぢやありませんか』

『あの方は氣の毒な方です』

と、房子は嘆息して、

『けれども、私は別にあの方を欺きも弄びもしたのぢや御座いません。――みんなあの方が御自分で――』

房子は口籠つた。

責むる者

『無論、それは八代の不聰明によるでせう。八代があなたのやうな女を――人もあらうに選りに選つてあなたのやうな女を擇んだのは、全く彼の不覺だつたのです。八代は高貴な精神の所有者だつた。だが、悲しい事には、彼には十分現實を見る眼が開けてゐなかつたのだ。この卑賤に充ちた世の中に生きるには彼はあまりに高貴過ぎたのです』

専一は稍ゝ嘆くやうに云つた。房子は、默つて項垂れてゐた。血のにじむばかりに、強く唇が

嚙みしめられてゐた。

『勝手に愛したのだ。勝手に苦んだのだ。而して勝手に死んだのだとあなたは云ふだらう？　自分には責任は無い事だ。然う云つてあなたは空嘯かうとするつもりなんだらう。だが、僕は然うは云はせません。あなたがどんなに惨酷に彼を翻弄したか？　どんなに手嚴く彼を恥かしめたか？——』

云ひ續けようとする專一の言葉を、房子は中途から搔きさらふやうにして、

『いゝえ、そんな——私、些ともそんなつもりでは無かつたので御座います』

と、涙を一ぱいに溜めた眼で、縋るやうに相手の顏を見上げながら云つた。

『まあ、その日記を讀んで見て下さい』

鋭い眼で屹と見返して、專一は卓の上に置いた亡友の日記を、房子の前に押しやるやうにした。

房子の眼はその日記の上に落ちた。が、彼女には手を出してそれを取上げる勇氣が無かつた。——彼女はもう一度ちらと專一の顏を見上げた。恨むやうな、訴へるやうな、許しを乞ふやうな、

鞭の下から主人を見上げる飼はれた犬のそれのやうな眼眸であつた。男を男臭いとも思はない、あの驕慢の女性房子はどうしたのか？　麗かな春の日の下に胸を張り翼をひろげた孔雀の姿はどうしたのか？　そこにゐる房子は、いぢらしいまでに打萎れた、一個の可憐な小娘でしかなかつた——。

『お讀みなさい！』と專一はうながした。

『は』

房子は素直に答へたが、未だ思ひ切つてとりあげる事が出來無かつた。

『それを見るのが怖いんですか？』

專一は、その房子の苦痛らしい樣子を快げに打戍りながら、もう一度鋭く促した。

わな〳〵とわなゝく手で房子はその日記を引寄せた。而して、頁から頁へと讀み進んだ。が、すべてで二十頁ばかりあるその日記を、半分ほど讀んだところで、もうこれ以上は堪へられないといふ風に、彼女はぱたりとそれを閉ぢて了つた。而して、額がその黑いクロオスの表紙に觸れるばかりに、低く〳〵項を落した。

『皆、讀んで下さい。しまひまで讀んで下さい！』

專一の言葉は、獄を斷ずる者のそれのやうに、鋭く而して冷かだつた。

『私が惡かつたので御座います。私が弱かつたものですから――最初から判然と申上げれば宜かつたので御座いますが――』

と、房子の言葉は、幾度も苦しげに中斷された。

『でも、故意にお苦しめしたのぢや無いのでございます。さうお思ひになつたのは、八代さんの誤解なので御座います。私、些ともそんな――』

『あなたも案外卑怯なんですね。妖婦なら妖婦らしく、潔く事實を認めたらいゝぢや無いですか？　今更、そんなつもりぢや無かつたの何のつて、未練らしく辯解なさる事もないぢやありませんか？』

『私は惡い女かも知れません。でも、私決してそんな――』

『いや、辯解などはどうでもいゝんです！　今更あなたの身勝手な辯解を聞いたつて何にもなるものぢや無いですからね。僕は辯解を聞く爲に斯うしてやつて來たのぢや無いのです。僕は唯

あなたにとつて遊戯にしか過ぎ無い戀愛が、ある誠實な男性にとつてはどんな眞劍な苦しみであつたかといふ事をあなたに知つて貰ひ度かつたのです。而して、あなたが蹂躙した一つの生命がどんなに高貴なものであつたかといふ事をあなたに知つて貰ひ度かつたのです。八代英吉は、あなたにとつては唯一人の馬鹿な男に過ぎ無かつたでせうが、しかしあの男は素晴らしく立派な、高貴な魂の所有者だつたのです。あの男の一人の母親、一人の妹、その人達の悲しみ嘆きは姑く措くとしても――また、あの男の親友としての、この僕の口惜しさ無念さはまあ云はないとしても、あの男の死が廣く世の中にとつてもどんなに大きな損失であつたか？　あなたは、自分のした事について、少しは考へて見なければならない筈です』

眼は炎の如く燃え、言葉は刄の如く刺した。威丈高になつた其の譴責者の前に、房子は唯低く頭を垂れた。彼女の手は卓の下の膝の上で、その純白の絹手布を裂けるばかりに押し揉んでゐた。

『はゝゝ！　だが、こんな事を云つて見たところで、あなたには一向利目は無いかも知れませんね。これが判るくらゐなら、最初からこんな事にはならない筈ですからね。外面如菩薩とか何と

かいふが、實際、容だけは美しくしても、あなたなんか、女らしい、いや、人間らしい心なんか有つちやゐないんだ。まるで牝狐だ！』

罵つても罵つても罵り足らぬといふ風にして專一は罵り續けた。

『まあ！』

と、房子は喘ぐやうに、振上げた顏は涙に洗はれて靑ざめてゐた。

『そんなにまで仰有らないでも宜しいでは御座いませんか？』

流石に忍び兼ねた憤りに、聲はわな〳〵とふるへてゐた。

『恥を知れとは云はないんだ。唯、すこしは畏れといふものを知つて貰ひ度いんです。豚に眞珠といふ言葉があるが、豚だつて眞珠と石ころの見わけはつくだらう。あなたが滅ぼした八代の魂は、あなたの戯戀の餌食にするには、あまりに高貴なものだつたのだ』

『ずゐ分、ひどい事を仰有るのですね。そんなにまで仰有らないでも——』

云ひ度い事は胸に一ぱいだつたが、それを云ふ事の出來ない悶々しさに身を押揉みながら、房子は、更にもう一度恨めしげに對手の顏を見上げた。——さうした、房子の態度は、專一に稍〻

拍子抜けの感じを與へた。專一は自分の怒罵に對して、昂然として、立ちむかふであらう房子を豫想してゐた。が、房子は案に相違して、飽迄もしをらしく自分の前に項垂れてゐる。專一は妙に張合のない氣持になつた。が、彼はすぐに思ひ返した。これが術なのだ！　憤りと憎みとを强ひて心に煽りながら、彼が、更に罵りの言葉を吐き出さうとした時、房子は沈んだ靜かな調子で云ひ出した。

『それは、私が惡かつたので御座います。最初からきつぱりとおことわりすれば宜かつたので御座いますけれど——いゝえ、それは幾度も申上げたので御座いますけれど——でも、矢張私が惡かつたので御座いませう。弄ぶとか恥かしめるとか、別段そんなつもりは無かつたんですけど——それどころか、私のやうな者をそれ程に思つて下さるお心は、有りがたいと思つてゐたので御座いますけど——自分でそんな風にするつもりは無いのに、そんな風に思はれるのは、私、矢張いけない女なので御座いませう。私は、自分で此の自分がかなしいので御座います。こんな女の自分が悲しいので御座います』

曲節的な響を含んだ美しい聲は、やゝ顫動を帶びて打ちしめりながら、しみ〴〵と嘆くやうに

云つた。その言葉には、聽く者の肺腑ににじみ入るやうな何者かが含まれてゐたが、專一は、それを撥ねつけるやうに、心の中で叫んだ。畜生！　お芝居をはじめやあがつたな！

『あなたが、八代さんのお友達として、八代さんの爲に私をお憎みになるのは御尤だと思ひます。ですけど、私、あなたにそんな風に仰有られるのは辛いので御座います。何よりも辛いので御座います』

云ひつゞけて、房子は双頰に涙を流した。

ふゝん！　空涙！　――專一は、口もとに嘲笑を浮べた。

『正直に申します。私、八代の御好意は感謝してゐたので御座います。私、あの方が――好きでない事は無かつたので御座います。で、その爲に、却つてこんな事になつたので御座います』

房子は、卓の上に八代の日記に涙を一ぱい溜めた眼を注ぎながら云つた。

『好きでない事は無かつた？　ぢや、どうして、八代の愛を受入れる事が出來なかつたのです？』

『それは――』

房子は苦しげに口籠つたが、思ひ切つたやうに、顏を振りあげた。而して、涙の底に燃える瞳で、じつと、まつすぐに專一の顏を打戍りながら云つた。

『私、他の人を愛してゐたからで御座います』

『他の人を？　――ぢや、他に愛する男があるんで、それで八代の愛を受入れる事が出來なかつたと云ふんですね』

『さうなので御座います。――それで、私は苦しんでゐるので御座います』

『苦しんで？　ふふん！』

と、專一は毒々しく嘲笑した。

『あなたのやうな人でも、人を愛して、そしてその爲に苦んだりする事が出來るんですか？　愛するとか、苦むとか、それは眞人間の云ふ事です。あなたなどが――生意氣な事を云ふものぢやありません』

專一は、毒々と云つた。

不幸なる告白

『都築さん！　あなたは隨分慘酷な方ですね』

專一の鐵槌のやうな言葉の下に、良久くの間、じつとうなだれてゐた房子は、强く嚙みしめた唇の間からやつとこれだけ云つた。

『慘酷？　はゝゝ！　このくらゐの言葉が、慘酷なんですか？　このくらゐの言葉が慘酷に響くほど、なまやさしいあなたの心だとは思へませんね』

『外の方からなら、私、何と云はれても構はない。あなたのお口からそんな風にひどいお言葉を聞かなければならないなんて！　私、何といふみじめな女なんでせう？』

『僕から云はれる事だから？　――それはどういふ理由なんです』

『都築さん！　媚婦とか、妖婦とか――あなたばかりではありません、世間の人は私の事を種々に仰有います。本當に、私、さう云はれても仕方の無い女かも知れません。私は惡い女だ――と自分で然う思ふ時が御座います。けれども、私はまるきり人間らしい心をもつてゐないかのやう

な仰有りやうは、あんまり酷う御座います。私だつて、本當に人を愛する事が出來無い女では御座いません。いゝえ。私がどんなに――どんなに或る一人の方への愛の爲に苦しんでゐるか？　もし、あなたがそれをお知りになつたなら！』

房子の眼は、涙の下から波の底に搖れる松明のやうに輝き、その頰はいくらか赤らんでゐた。恨みとかなしみと、羞恥と、その堪へがたい羞恥に打克たうとする努力と、あらゆる表情が亂れ合つたその顏は、たとへば、風雨の中にゆらぐ大輪の緋牡丹をでも見るやうに、妖艶でそして、なやまし氣であつた。而して、おそらく彼女自身は意識しないであらうところの、彼女にとつては一つの自然の發露であり、それ故にこそ、一層魅力的な媚きが、彼女の全體から流れ溢れるのであつた。

『僕は、あなたから戀愛の告白を聽く爲にやつて來たのぢや無かつた筈ですよ。はゝゝ！』

と、專一は用捨もなく嘲笑して、

『だが、あなたに選ばれたといふその光榮あるあなたの戀人は、一體どんな男でせうかね。參考の爲めに一つ承はつて置きませうか？』

『申し上げますわ』

『承はりませう！』

『私、せめてそれだけ知つて頂き度かつたのでございます。――私、思ひ切つて申上げますわ。都築さん、それはあなたなのです！』

屹と、專一の顏を見据ゑた眼は、むしろ凄いばかりに輝いてゐた。

あまりに意外な房子の言葉に、專一は思はずはッとした。いきなり眞甲から斬りつけられ、暫くは眼が眩んだといふ感じだつた。彼は、辛うじて彼女を見返した。じつと押し迫るやうな彼女の二つの眼！　必死の爭鬪の後で、彼はやつとその眼をはじきかへす事が出來た。

『はゝゝ！』

と、彼は笑つた。而して喘ぐやうに云つた。

『何を馬鹿な！　出鱈目もいゝかげんにするがいゝんです』

はげしい羞恥で彼女の顏は眞赤になつた。と、思ふと、彼女は兩つの袂で顏を抑へ、いきなり卓の面に突伏して了つた。聲を立てはしなかつた、が、きつと嚙みしめた唇の口尻のところ

が、痙攣のやうにわなゝき、濃い紫の襠袢の襟から奥深く見透かされる白玉のやうな頸筋の波のやうなうねりと共に、丸らかな肩の線も大搖れに搖れた。此の女は本當に泣いてゐるのか知ら？　專一は、物にでも憑かれたやうな、妙な氣持に引き入れられながら、しばらくぼんやりとそれを眺めてゐたが、畜生！　と、再び心に叫んだ。牝狐め！　そんな事をして、此のおれをまでたぶらかさうとするのか？

『あなたが信じて下さらないならば、それも仕方がございません』

と、房子は、やがて面を卓の面から離して、しかし、低くうなだれたまゝ、小さい聲で云つた。

『でも、これほど思ひ續けてゐながら、それが本當にして頂け無いなんて――ぢや、私といふものが、あまり可哀さうで御座います。――私は、どんなに私があなたをお慕ひ致してゐたところで、私の心が、あなたに受入れて頂け無いだらうと云ふ事は、もう覺悟して居るので御座います。あなたには別に愛していらつしやる方がおありなのですものね』

房子は、妬ましげにちらと專一の顏を見て、

『ですから、私、此の心を掬んで下さいなどとは申上げません。たゞ、長い間、私はあなたをお

慕ひして居ましたと――いゝえ、今でもお慕ひして居るのでございますと、唯、これだけの事をお傳へし度かつたので御座います。せめて、此の心を知つてだけはいたゞき度かつたので御座います』

何を出鱈目をいふのかと思ひながらも、次第に、その訴への中にひき入れられてゆきながら、專一は、兎に角、言ひ度いだけ言はせて見ようといふ氣持で、默つて房子の言葉を聞いてゐた。

『私は、あなたにお目にかゝる事が出來た最初の時から、ずつと今まで、あなたの事ばかり思ひつゞけてゐたので御座います。もう四五年にもなる長い間、私の心の秘密として、唯、あなたの事ばかり思ひ續けてゐたので御座います。お打明けしようと思つた事は、幾度だつたか知れませんが、私にはそれだけの勇氣が無かつたので御座います。お轉婆娘の私も、あなたの前には、自分でも口惜しいほど意氣地が無くなつて、それらしい素振さへ見せる事が出來無かつたので御座います。でも、あなたが御歸朝になつたならば――と、私はあちらへあなたがいらしつてからも、再び斯うしてお目にかゝれる日をばかり待ち續けてゐたのでございます』

『……』

『私は惡い女かも知れません。八代さんばかりでなく、私を恨んでいらつしやる方、弄ばれたと思つて私を憎んでいらツしやる方は、外にもまだあるで御座いませう。私が、若し、あなたといふ方を、こんなにお慕ひしてゐるので無かつたなら――』

抑へ抑へてゐた情熱の迸りが、今や、彼女の羞恥を乘り越えてしまつた。たとひその言葉がどのやうに受取られるにせよ、長い間その胸の中に封じられてゐた言葉を斯うして打出づる事によつて、彼女は情熱の解放に伴ふ一種のよろこびを感じたに違ひ無かつた。彼女は、前後をわすれて、唯、一心にその告白を續けた。

『ぢや、つまり、あなたは僕を愛してゐた、それで、八代を愛する事が出來なかつたのだと云ふんですね』

專一の言葉が、その告白を中斷した。

『然うで御座います。八代さんばかりではございません。いろ〳〵の方からいろ〳〵の御申込は受けましたけれど、私の本當に愛する事が出來るのは唯一人だけだつたので御座います。私の心は、一人の方に――あなたにさしあげて了つてゐたのでございます』

『ぢや、あなたをそんな媚婦にしたのも、原因は皆僕にあるんだといふんですか？』

『いゝえ。さういふわけでは御座いませんけれど――』

『でも、つまり然う云ふ事になるのぢやありませんか。で、結局、八代をあんな風に悶死させたのも、みんな僕といふ人間があつたればこそだといふ結論になるのですね』

『そんな風に仰有られては困りますの。でも、私がその爲にどんなに苦しんだか？　それだけはあなたに知つて頂き度いので御座います。私はいけない女かも知れません。いゝえ、私たしかにいけない女で御座います。私の身體には、私自身でもどうにもならない惡い血が流れてゐるので御座いませう。ですけど、あなたに對してだけは、私、どなたにも負けないだけの、眞實な純粹な愛を捧げて來たので御座います。媚婦だの妖婦だのと、私の事を仰有る方は澤山ございます。そんな風に云はれても仕方が無い私だと自分でも思つてゐるのでございます。ですから、他の人にそんな事を云はれても私は平氣で居れるので御座います。でも、あなたからそんな風に云はれるのは餘り辛過ぎます。あまりみじめ過ぎます。私は、自分で自分がかはいさうになるのでございます』

云ひ續ける房子のその血の退いたあとの青白い頰には靜かに涙が流れた。眼頭のところを抑へた指先にも一粒二粒と滴く涙が、その無名指の指環のダイヤに濡れきらめいてゐた。

何といふ巧妙なお芝居！　專一は、決してそんな手管には乘らないぞと心を緊め、氣を張つてゐたのであるが、しかし、これが果してお芝居であらうか？　果して手管であらうか？　此の悲み、此の涙――これが、僞りのものであらうか？　專一は、自分の眼の前に泣くその艶なる人の姿を、物惑はしく打成つた。

『私、たゞ此の心持を知つてだけ頂けばよろしいので御座います。一度お目にかゝつて、これだけの事を申上げ度かつたので御座います。でもまあ私、何といふ恥知らずな女なのでございませう。こんな耻かしい事を申上げるなんて――』

房子はさう云つて、再び戻つて來た羞耻の爲めに顏を赤めて涙の中で少し笑つて見せた。その微笑が、彼女の顏全體を不思議な媚きで華やがせた。――而して、長いまつ毛の下から、柔かにうるんだ眼眸でじつと見上げながら、すこし半身をくねらせるやうにした其姿！　妖しきばかりのその嬌態の前に、專一は思はず意識をとり失うて、全身の血が我ともなく騷ぐのであつた。

『本當にあなたは――』

と、專一は吃りながら云つた。

『それは房子さん！　本當なのですか？』

『こんな事にどうしてうそが申上げられませう』

『ぢや、本當に――』

と、ふら〳〵とのめりかゝるやうな心持で斯う云つたが、その時、『都築さん！』といふ聲が彼の耳元に落ちた。――靜代の聲だつた。悲しげなまなざしでじつと自分を見てゐる靜代の眼が、つゞいて彼の眼の前に浮んだ。彼ははつとして我に歸つた。

『はゝゝ。』

と、專一は突然に笑ひ出した。

『なか〳〵手の込んだお芝居ですね。あなたは、たしかに名優ですよ、ですが、僕には、あなたの相手役は、つとまりさうもありません』

『まあ！　――私が、これ程恥を忍んで申上げたのに――どうしてもあなたは信じて下さらない

のですね』

房子の顏はほの白んだ。

『いゝかげんになさいと申上げるより外御挨拶のしやうもありませんね』

專一は、さう云つてからすつくと立ち上つた。そして房子の前に置いた亡友の日記を掻き浚ふやうに取上げて、

『他に御用は無いんでせう、僕は失禮します』

と、云つた。

『お歸りになりますの？』

『歸つちやいけないんですか。はゝゝ、まだ幕はおりないんですか――兎に角、僕はもう引き込みませう。貴女のお對手には、代りあつて、又種々の登場人物があるでせう』

云ひ捨てると專一は、房子の返事も待たずに、さつさと室を出て、玄關の方へ降りて行つた。

專一が佐竹家の玄關まで出ようとすると、丁度其の時、門をはいつて徐行して來た一臺の自動車が、車寄せに駐められたところだつた。先づ飛び降りた運轉手が、扉を開けると、中から降り

立つた一人の若い紳士があつた。見ると、それは專一の義理の兄の龍彦であつた。

『やあ』

と龍彦は、此の意外の處での出會ひに驚きの聲を擧げた。

『やあ』

と、專一も應じた。

『君は此家へ來て居たのかい』

『うむ。今歸るところなんだ』

『何の用事で此處へやつて來たんだい?』

『此處のお孃さんの房子さんに一寸用があつたのだよ』

『房子さんに? 君が?』

龍彦の眼は神經的にきらめいた。

其の時專一を送り出す爲めに、其處に房子が降りて來た。房子は、龍彦の顏を見ると、

『あら、いらつしやい』

と、彈みの無い懶げな調子で云つた。と同時に、

『失敬します』

と、專一は投げつけるやうな挨拶をして、さつさと門の方へ出て行つた。

妙に荒んだやうな、蒼ざめた顏で、房子はずつと專一の後姿を見送つて居た。專一の姿が門內道の曲線の蔭に隱れて了ふ迄、荒く砂利を踏む足音が、やがて聞えなくなつて了ふ迄、房子は身動きもせずにさうして見送つてゐるのであつた。

その樣子を眺めて居た龍彦は、

『房子さん』

と、堪らなくなつたやうに呼び掛けた。

房子は、其の言葉も耳に入らぬやうに、じつと立つてゐる。

『房子さん』

龍彦が再び呼び掛けた時、房子は漸やく懶げな眼で、そのうるさい訪問者の方を見返した。

哭いたあとで

今のさつき迄、專一の掛けて居た椅子に、龍彦が掛けた。房子は、龍彦と向ひ合つて掛けてはゐたが、彼女の心はあらぬ方に飛んで居た。

『房子さん、あの男は何の用事があつて、貴女を訪ねて來たんですか？』

『あの男？』

『都築ですよ。專一ですよ。あの男は貴女に何か用があつたんですか』

『えゝ、一寸』

『どんな用事なのです』

『……』

房子は答へずに、うるささうに頭を振るやうにした。房子の顏はひどく蒼ざめてゐた。唇は乾き、眼は殺氣を帶びて輝いてゐた。暴風雨が過ぎた後の、然し未だ靜まり切らぬ海のやうに、烈しい動亂の痕がその表情に漂ひ殘つてゐた。

『房子さん、あなたはどうかなすつたのですか？』

と、龍彦はおづ〳〵とした調子で聞いた。

『……』

『御氣分でもお惡いんですか』

『えゝ、何だか頭痛がして堪らないんですの』

『それはいけませんね。實は今晩は久し振りで散歩にでもお誘ひしようと思つてあがつたのですが』

『今晩は御免蒙らして頂きます』

房子はにべも無く云つて、

『もう兄が歸りましたでせう。只今兄が參ります。私は失禮さして頂きます』

と云ひ捨てるなり、房子はよろめくやうな足どりで、應接室を出てしまつた。

房子は、自分の部屋に歸ると、安樂椅子の上に、しんの拔けた樣に力無い身體を投げつけた。頭痛がするといふのは口實だけではなかつた。實際、頭の髓がしく〳〵と痛んだ。頭だけではな

かつた。より激しい痛みが心臓を疼かせる。彼女の心は、棘の鞭で打たれたあとの傷口から、激しく血潮を吹いてゐた。

もう夜になつてゐた。が、部屋には電燈も點いてゐなかつた。彼女は崩れた花瓣のやうに薄闇の底に身を投げて身動ぎもしなかつた。唯、眼ばかりが、熱を病むやうにきら〳〵と燃えながら、眼の前の一點をみつめてゐた。

あの人は何て酷い事を云ふのだらう？　――と、彼女は、專一に言はれた言葉の一々を心の中に繰返して見た。何といふ激しい罵倒！　何といふ思ひ切つた侮辱！

あの人は、最初から私を人間扱ひにはしてゐないのだ。媚婦、妖婦、而して牝狐――いゝえ、豚とさへも！

『ほゝゝ！』と、彼女はヒステリツクに笑つた。豚！　私を豚とまで云つた人はあの人が初めてだわ！

豚でさへ眞珠か石かの見わけはつく――とあの人は云つた。眞珠か石か。その見わけがつかないのは、私ぢや無くて、さういふあの人なのぢや無いか？　あれほどまでの眞心を籠めての私の

告白、誇を捨て恥を忘れての命賭けの私の告白――あの人はそれを僞りだといふのだ。お芝居だといふのだ。

私は何も、私の愛をあの人に受入れて貰はうとは思はなかつた。唯、此の心をさへ知つて貰へればそれでいゝと思つてゐたのだ。長い間、どんなにあの人を愛してゐたか？　此の苦しい愛、悲しい愛を、せめては知つてだけ貰ひ度い――と、たゞさう思つてゐたのに。

愛して、その愛を受入れられないのは悲しい。しかし、愛して、その愛してゐるといふ事實を認めてさへ貰へないのは、悲しい以上にみじめである。あまりにみじめである。

彼女は、ふと、あの貧しい畫家の三好明を思ひ出した。三好明が、道化者の假面に苦しい心を隱して、自分に訴へたあの訴へを思ひ出した。『あなたは、僕が命懸けで戀してゐるのに、僕の戀を認めてさへ呉れないんです。せめて認めてだけは呉れてもいゝぢやありませんか？　僕の愛を受け入れて下さいなどとは云ひませんよ。唯、僕がどんなにあなたを愛してゐるか？　此の心持だけを知つて頂き度いのですよ。認めて頂き度いのですよ』それが、あの男の言葉だつた。そして、丁度同じやうな言葉で、あの人の前に嘆いた自分では無かつたか？　『矢張、本當にはして

貰へないんだ！　おゝ、呪はれたる男よ！』さういつてあのおどけ者の畫家は嘆息した。それは同時に自分の嘆息ではなかつたか？　――さうだ。あの人の前には、自分も亦、あのみじめな男と全く同じ存在でしかないのだ。あの不恰好に大きな鼻をした、髭と垢とで薄ぎたなくよごれた顏をした、あのみじめな道化者――自分も亦、あの男と全く同一の人間なのだ。

いや、自分は、少なくともあの男の愛を感じてはゐる。嗤ひながらも、嘲りながらも、心の底ではあの男の自分に寄せる愛情を感じてはゐる。嗤ひこそすれ、嘲りこそすれ、決してあのやうに酷く罵つたり、いたはり無くはづかしめたりはしなかつた。あの男だつて、決して自分ほどには、みじめではないのだ。おゝ、世の中に自分ほどみじめな戀をしてゐる者があらうか？　自分ほど蹂躙られた戀愛者があらうか？

そんな風に考へて來ると、房子の眼からは再び熱い涙が溢れた。涙は、薄闇の裡で、銀の條のやうにきらめいた。

しばらくさうしてひとりで泣いて居たが、やがて房子は衝き動かされた樣にして身を起した。

いゝえ！　どうせ私は媚婦なのだ！　妖婦なのだ！　どうしても、此の愛が信じて貰へないなら、私、もう信じて貰はなくてもいゝ！　私は、此の不幸な愛を胸の底深く葬つてしまはう！

而して、今まであの人に捧げてゐた愛と同じほどの憎みであの人を憎み返してやらう！　妖婦ならば妖婦でいゝ！　私どこまでも妖婦としてあの人に立ち對はう！　これほどまでに虐げられた者の憤り！　これほどまでに傷け恥かしめられた者の憤り！　私はもう我慢がならない。私は、私の誇りの爲めに、あの人を許して置けないのだ！

待つていらッしやい。屹度かたきを討つてあげますから！

房子は、きら〳〵ときらめく眼を闇にみはりながら、かう心の中に叫んだのであつた。

夢魔

房子の家の門を出た專一は、何者にか追はれるやうな氣持で、急ぎ足で、ちら〳〵と灯のともり初めた街の方に歩みを運んだ。

電車の停留場のところまで來ると、彼はほつとした。でもまだ、あの房子の强い眼眸でうしろから追ひ詰められてゐるやうな不安な氣持から脫け切る事は出來無かつた。

十分罵つてやつた。痛快にやつつけてやつた――然う專一は思つた。が、その痛快さは些とも感じられなかつた。何か不安な、胸苦しい氣持だつた。

思ひ掛けない房子の告白！

無論、あれは芝居なのだ。あれがあの女の術なのだ――と、專一は思つた。が、どうも、然うとだけは思つてしまひ切れない氣がする！　あの涙、あの涙に濡れながらの訴へ――あれが、本當にお芝居だらうか？

若し、あれがあの女の眞實だつたとしたら？　あの女が長い間ひそかに自分を戀して居たといふのが若し眞實であつたとしたら？

否、そんな事は無い。あれは、矢張お芝居なのだ。あの女の技巧なのだ。あんな事を云つて、おれの憤りを、おれの非難をはぐらかさうとしたのだ。

彼は、電車に乘つてからも、とつおいつ、そんな事を思ひ續けた。――彼女の、涙の底から燃える眼が、眼の前にちらついた。羞恥に赤らめられた頰と、悲みにうなだれた頸筋と、その嘆きの故に一層魅力あるものにされたなまめかしい彼女の姿が、濃かな官能の香ひをさへ帶びて、し

つこくなやましくまつはつて、どうしても離れないのであつた。彼は、うつとりとして、すべてを忘れてその幻影に見入つてゐる自分に氣がついてははつとした。

專一は、歸りに靜代の許へ寄る筈であつた。が、どうも靜代に會ふ氣持になれなかつた。

靜代！――彼は、胸の中の靜代の姿が、いつの間にかぼんやりと薄れてゐる事に氣がついた。而して、その代りに、たとへば濃い牡丹の花のやうな、あやしい謎の面影が、あの房子の姿が、胸一ぱいに咲きひろがつてゐる事に氣がついたのであつた。

靜代さん！

彼は斯う呼んで見た。靜代は、遠くの方で悲しい眼を睜つてゐた。

おれはどうかしてゐる！

專一は、かうつぶやいて頭を振つた。

專一は、家に歸ると、一人、自分の部屋に坐つてゐた。而して、一生懸命に、その美しい夢魔と戰つてゐた。

龍彦が、そこへはいつて來たのは、もう夜が更けてからであつた。

『未だ起きてゐるのかい？』

龍彦は、外から歸つて來たまゝの服裝だつた。いくらか酒氣を帶びて居るらしく、而してひどく落着かない樣子だつた。彼は、穿鑿的な眼で、龍彦の顏を眺めた。

『えゝ。兄さんは今お歸りですか？』

『うん』

と、龍彦は答へて、

『あすこで君に會はうとは全く思ひがけなかつた。君は、あの人に何の用事があつて訪ねて行つたのだい？』

『別に用事つてわけぢや無かつたが——』

專一は言葉を濁して、

『それよりも、兄さんは、此頃あの人と親しくしてゐるんですか？』

『僕はあの人に結婚を申込んでゐるんだ』

『あゝ、然う？』

專一は輕く受けた。そのわざとらしい調子の輕さが、却つて專一の心の動搖を語つてゐた。

『僕は率直に聞くがね。君はあの女をどう思つてゐるんだ？』

『どう思ふつて？』

『僕はあの女と結婚しようと思ふんだ』

『結構でせう』

『君はそれに就て別に異議は無いだらうね』

龍彦は、妙に熱ッぽい眼付で云つた。

『勿論ですよ。どうしてそんな事を僕に聞くんです？』

『君とあの女との間には別に何の交渉も無いのかい？』

『勿論、ありませんよ』

『さうか？　そんならいいけど——どうも、あの人は、何人か愛してゐる人があるらしいんだ。それが君ぢや無いかと、一寸思つて見たんだがね』

『そんな事はありませんよ』

『だが――あの女は、實にわけのわからない女だぜ。彼の女にだけは、どうも手古摺らせられるよ』

『流石の兄さんでも持餘しますかね』

『うむ！　彼奴、まつたく媚婦に違ひ無いよ』

龍彦はそんな事をつぶやいたが、――そして、尙ほ、何か語りかけ度さうに、しばらくそこにゐたが、やがて部屋の外へ出て行つた。

その夜一夜、專一は殆ど眠らずに明かした。

あくる日、早速、靜代の許を訪ねなければならないと思ひながら、專一はどうしてもその氣になれなかつた。覺めながら、美しい夢魔にうなされでもする氣持で、彼はぼんやりとその一日を過した。

差出人の書いてない一通の手紙を、彼が受取つたのはその日の夕方であつた。

封筒と同じ色の、空色の書簡紙にペン書きのその手蹟には見覺えが無かつたが、それが、佐竹房子からのである事は、二三行讀んだだけでわかつた。

（昨日は失禮いたしました。

さん〳〵のお叱りにて、誠に恐縮に存じます。あのくらゐ、嚴しいお叱りを受ければ、少しは性根も附く筈でございますが、仰有る通り、そんなしをらしい性根などは最初から持合せてゐなかつた私、今朝になつて考へて見ますと、馬耳東風とやら、お叱りのお言葉も大方はもう忘れてしまひました。それにしても、八代さんはお氣の毒に存じます。お氣の毒には存じますが、それを私の責任になさるのは、全くお門違ひと申すもの、折角のお叱りながら、これは忘れて了つた方が當然かと存じます。

それはそれとして、昨日はあまり不意に種々の事を仰有られたので、私一寸取りのぼせた樣でございます。そして、隨分出鱈目の事を口から出まかせに申し上げましたが、それは仰言る通りお芝居だつたに相違ありません。其の時は、別にその氣も無いのですが、知らず〳〵あんな風になるのでございます。でも、昨日のお芝居は、我ながら大變不出來だつた樣でございます。一つは相手役のせゐでもあらうかと存じます。本當に貴方はあまりお芝居氣が無さ過ぎる方で御座います。貴方の樣な方にあつては、さすがの名優も形なしでございますわね。

いづれその内、相當の相手役を見付けて、私の名優ぶりを發揮してお眼にかけませう。喜劇になるか、悲劇になるか、それは今の處わかりませんけれど。

つまらない手紙を書きました。どうぞ貴方のあの方にもよろしく。亂筆御免ん下さいませ）

手紙はさう書かれてゐた。宛名は尋常に書かれてあつたが、署名には、（貴方のヴンパイヤより）と記してあつた。

專一は、その手紙を讀んで了ふと、しばらくの間ぼんやりと眼を見張つてゐた。そして、

『畜生！』

と、口に出して云つた。彼の顏は見るみる朱を濺いだ。

が、その血が次第に引いて行くと、彼は神經的に震へる指先で、ぴり〳〵とその手紙を引裂いた。そして、

『は〻〻』

と、空虛な聲を立て〻笑つた。昨夜からの不思議な心の苦しみが、馬鹿々々しいものに顧みられた。白け切つた心には、いくらかの腹立たしさも殘つたが、然し、これでいいのだと云ふ安心

が、ほつと長い息を吐かしたのである。

＊　＊　＊

それから二三十分の後、專一は、靜代の家で、靜代と向ひあつてゐた。

『どうしたのかと思つて私、本當に心配しましたの。だつて、昨晩も寄つて下さらず、今日も朝からお待ちしたのに、なかなかお見えにならないんですもの。本當に私、どうなすつたのかと思つて』

靜代は、涙含んだ眼で、取り縋るやうにして云つた。

『さうですか、今朝は早く來ようと思つたんですけれど——』

と、專一は曖昧に云ひまぎらして、

『だが、どうして、そんなに心配したんです。昨晩一晩寢なかつたなんて、そんなに心配する事は無いぢやないですか』

專一は優しく微笑しながら云つた。

『でも、私——』

『馬鹿だなあ、靜代さんも』

と、專一は、靜代の細い肩を抱き寄せるやうにして、

『痛快だつたよ、靜代さん、思ひ切りあの女をやつつけてやつたよ。散々油を取つてやつたよ。何の彼奴の手管なんぞ――はゝゝ』

專一は、强ひて快活に笑つて見せたのであつた。

新生活

歳暮から春にかけての、僅か二月あまりの間に、榛澤家には二つの出來事があつた。一つは、洋行から歸つたばかりの專一が、家を出てしまつた事である。一つは、嗣子の龍彦と佐竹房子との婚約が發表された事である。

專一の家出は、つまり彼の獨立を意味してゐた。同時にまた愛の完成を意味してゐた。彼は家を出ると、亡友八代英吉の妹の靜代と結婚したのである。此の結婚は、結果に於て彼の父の意志を蹂躙した事になつた。彼の父は、彼が畫家を志した事に第一反對だつた。彼の結婚に就て

も、父は父で、ひそかに一つの心算を立てゝゐた。然るに、專一はすべての點に於て父を裏切り且つ出し抜いた。一酷者の父は、すつかり腹を立てゝしまつた。

『否や！　どこまでも、私は不承知ぢや』

と、父の龍藏は、資本家肥りに肥つた身體を激しくゆすりながら云つた。

『事後承諾は私は可厭ぢや。前に一言相談してからなら兎も角、勝手にちゝくり合つて置いて、結婚したから認めて呉れは、あまり親を馬鹿にし過ぎとる！』

『認めて頂けないなら仕方がありません』

專一も、反抗的な態度に出でざるを得無かつた。

『私の不承諾を押切つて、どうしてもその女と結婚するといふんなら、私は構はん！　勝手にせい。その代り――』

と、父は、爭議團の代表者に向つて、工場閉鎖を宣言する時のやうな、高壓的な威嚇的な態度で云つた。

『その代り、お前の今後に就いて、一切責任は負はんからそのつもりでゐろ！　お前は空手で、

此の家を出て行かにやならんぞ！　それを承知なら勝手にしろ』

『勿論、承知です』

専一は顏色ひとつ變へずに、事も無げに云つた。そのあまりに平氣な樣子が、一寸拍子抜けの感じを父に與へた。

『お前が、おれに柔順でさへあれば、おれはお前に相當のものを分けてやるつもりでゐたのだ。一生食ふに困らんだけの、物質的保證を與へてやる――私もお前の親として、親だけの義務はつくすつもりでゐたのぢや。が、お前がさうして飽迄も私に楯突かうといふんなら、私もすべての義務を拋棄するまでぢや。子が子で無い以上、親も親で無くなるまでぢや』

肥滿の爲めに少し心臟を惡くしてゐる父は、激しい腹立の爲めに、鞴のやうに呼吸を喘がせながら、かう云つて專一を睨みつけた。

『仕方がありません。――最初から、別にあなたの御厄介になるつもりは無かつたのです』

專一は、むしろ對手を揶揄してゐるのかと思はれるほど冷靜な態度で答へた。

『御厄介にならぬつもりだと？　今まで、さんざん厄介を掛けておきながら、今更何といふ減らず口ぢや？』

『今までの事は十分感謝して居ります』

專一は、慇懃に云つた。專一には、父が特別に自分を愛して呉れたとも思はれない。むしろ冷淡な父だと思つてゐた。が、時には、肩身の狹い此家での自分の存在を、父の眼だけが優しく庇つて呉れてゐると思つた事もある。冷淡な父であつたが、親の愛情は解してゐる父だつた。それを思ふと、斯うして父に背いて出て行く自分が少し悲しくなつた。

その專一の感傷的な氣持が、父の心にもつたはつたかして、父は稍〻怒りを鎭めて、しめッぽい眼附をして、

『な、ようく考へて見なさい』

と說得的な口調になつて續けた。

『お前は未だ世の中といふものを知らないからそんな事を云ふのぢや。そこへ衝突かつて見ればその時わかるだらう？　戀とか藝術とか云つたところで、饑ゑの前に何の力があるものか？　最も痛切なのは生活の問題ぢや。食へるか食へぬかの問題ぢや、お前は未だ金といふものゝ威力と

いふものを知らんのぢや。知らんから金といふものを輕蔑するのぢや。その輕蔑は、いまに恐ろしい復讐でむくいられるぞ。――どうぢや？　もう一遍考へ直して見ては？　もし、その女と延引ならぬ行懸りにでも、なつてゐるといふなら、その方の處分は私が引受けてやつてもいゝ！　金で始末がつくものなら――いや、金さへ出したら、それで文句は無いのだらう？』

『どうぞ、そんな御心配はなさらないで下さい。僕には、金が此の世の中で最上のものであるとは何うしても思へ無いのです。――食へなくなつたら野垂死をする迄です』

專一はきつぱりと云つた。

『いゝ覺悟ぢや』

父は再びくわッとなつて、

『これ程云つても判らんものなら仕方がない、勝手にせい！　だが、困つてから――二進も三進も行かなくなつてから、見ッともない吠面を提げて來ても、私は一切構はんからそのつもりで居ろ！』

『僕も男です！　たとへ、野垂死をする迄も、再びお力に縋らうなどは思ひません！』

『よく云つた。その口を忘れるな』

『忘れません』

『わしは今日限り、お前に對するあらゆる責任を投げ捨てる。私は、自分に叛く者を子と呼ぶ事は出來んのぢや。ぢや、勝手にせい！』

專一の父は斯う云ひ捨てると、どしん〳〵と疊を踏み鳴らして部屋を出て行つてしまつた。

――斯うして專一は、その父と手を切つてしまつた。勿論、悲しい氣がしないでは無かつたが、しかし、いつか斯うした時がやつて來るであらう事は、前から覺悟してゐた。これでいゝのだ！　と思ふと、一方では心の輕くなるやうな氣がした。

かうして父親との正面衝突の結果、專一が、榛澤家を出たのは、正月の半ば過ぎであつた。專一は、行李一つにも足らぬ、僅かばかりの身の廻りの物を携へて、西五軒町の方の靜代母子の家に投じた。靜代母子は、父の代から長い間住み馴れた今までの家を引き拂つて、その江戸川に近い、長屋建の、玄關を入れて四間しかない狹い家に去年の暮からかはつて居た。然うして、思ひ切つて生活を切り詰めねばならぬ程、彼女達の手許は切迫してゐたのである。靜代の父はもと

より名利の外に超然たる清高な學徒であつた。名は欲せざるに高まつたが、利に緣の無い書齋裡の生活は、唯ひどく不自由をしないといふ程度のものに過ぎなかつた。それでも、父祖から傳へられた、いくらかの財產がどうやら英吉の學資に足りる位は殘されてゐた。英吉の學問が成り、その學問が活計の手段にも役立つならば――と思つてゐた。その英吉はあの樣にして世を去つて了つた。そこで、靜代親子は正に生活の危機に直面したのである。專一は今や彼女達の生活を負うて立たねばならない。しかも、父と手を切つてその物質的援助を失つた今、彼は赤手、生活の大波と戰はねばならないのであつた。

然し、專一は勇氣のある青年だつた。とりわけ愛が彼を力づけた。愛する者の爲めに！　その爲めになら、どんな烈しい戰ひも辭するところではない。彼は、その愛の試錬として、むしろ喜んで身を生活苦のうちに投じたのであつた。

思ひ妻

專一は、書家としては未だ全く無名であつた。尤も一部では彼の非凡な天分に、ひそかに望み

を囑する者もあつたけれど――。で、その藝術に市價を有ち得ぬ彼は、ある知人の紹介で、某雜誌社の社員となつた。「繪も描ける」といふ點を重寶がられて、それから出る少年雜誌の編輯部の一員となり、毎日コツ〳〵と通勤する事になつた。勿論、雀の餌程の薄給ではあつたが、それでどうにか三人の口過ぎは出來た。いや、どんな物質上の不足をも、愛が十分に埋合はせた。愛し愛される者の生活に、少しばかりの貧乏などが何であらう！　その貧しい月給取の生活も、專一にとつては輝きに充ち、悅びに溢れた素晴らしい幸福の朝夕であらねばならなかつた。

だが、靜代母子にして見れば、さうして自分たちの生活を、專一一人の肩に投げ掛けてゐる事が、ひどく心苦しく思はれるのであつた。

『都築さん』

と、一緒に棲むやうになつても、前の呼び癖で、「都築さん」と云つてゐる靜代の母は、心からの濟まなさで時々斯んな風に云つた。

『あなたといふ者が無かつたら、私たち親子は、まあどうなつたでせう？　本當にあなたは私たち母子にとつては救ひの神樣ですよ。何と云つてお禮を申上げていゝのか――靜代にも申します

んですが、此の御恩は決して忘れてはならないとね』

『お禮だの恩だのつて、どうして阿母さんはそんな他人行儀な事を仰有るんでせうね。そんな風に仰有ると、僕は腹を立てますよ』

『でも、私共の爲めに、お宅の方ともあんな風になつておしまひなんだし——』

英吉の死以來、俄かに老いと、衰へを加へた靜代の母は、此頃では一日の半ばを床の中に過すほど弱つてゐたが、身體と共に心も弱つて、ともすれば感傷的な涙を見せるのであつた。彼女は涙ぐみながら續けた。

『私たちの爲めに、何も彼も犧牲にして下すつたのだと靜代も申して居りますよ』

『阿母さん！　もうそんな事は云ひツこなしにしようぢやありませんか？——僕は此の通り幸福なんですからね。本當に自分程幸福な者は無いと僕は思つてゐるのですよ。僕に此の幸福を與へて呉れたのは一體何人なんです？　感謝しなければならないのは却つて僕なのですよ』

專一は、朗かな笑顏で斯う云ふのであつた。

『ねえ。あなた』

と、靜代がある時こんな風に云ひ出した。朝早くから夜遲くまでの、かなり激しい勤務に、自分自身の時間をいくらも有ち得ないやうな專一の狀態は、とはいへ、靜代の胸を痛めずにはゐなかつたのである。

『ねえ。私も働いて見度いの。私を働かして見せては下さらない？』

『靜代さんが働く？』

專一は、びつくりしたやうに眼を睜つた。

『えゝ。事務員か何か、私にだつて出來る仕事があるでせう？　私が働きますから、あなたはもうすこし樂なところへ代つて、せめて半日宛でも勉强が出來るやうになすつたら何う？』

靜代は、健氣に思ひ込んだ調子で云つた。

『はゝゝ』

と、それを聞くと、專一は聲をあげて笑つた。

『靜代さんが、ぢや、女事務員にならうつてのかい？　はゝゝ！　馬鹿なー　そんな馬鹿な事が出來るものか？』

『あら、何故？』
『何故つて、それはあまり馬鹿げて居る』
『私にや出來ない？』
『出來る出來無いは問題ぢや無い。僕はいやだよ。あなたを職業婦人になんかするのは、僕斷然可厭だよ！』
『どうして？』
『はゝゝ！　あなたは職業婦人つてものがどんなものか？　を、全然知らないんだ。だから、そんな事を云ふんだ！　ねえ、靜代さん、僕はあなたを生活の渦卷には捲き込ませ度く無いんだ。こんな弱々しいあなたがどうして人中に出て働けるもんか？　いや、この美しいあなたを、あの猥雜な男共の中にさらしものにする――そんな事が出來るもんか？　そんな事をしたら僕は不安の爲めに氣が狂ふだらうよ、僕はこれでかなりな嫉妬家らしいからね、はゝゝ！　僕は出來る事なら、綿に包んで箱に入れて、何人も知らないところへ、そつとあなたを藏つて置き度いくらゐなんだ！　だからね、もうそんな、馬鹿氣た考へは止めて下さい。なあに僕の繪だつていまに賣

れて來るよ。さうすりや、あなたやおかあさんにだつて、こんなみじめな生活はさせときやしないよ。もう少しの辛抱なんだ』
『でも、今のやうだと、あなたが勉強なさる際も無いぢやありませんか？』
『大丈夫！　僕は勉強してゐるよ』
『それは然うですけど、無理なすつて、お身體を惡くなさりでもすると――』
『大丈夫ですよ』
と、專一は、微笑しながら、靜代の肩に兩手をかけて引き寄せた。而して、妻といふ名には呼ばれても未だ處女々々したはぢらひを捨て得ぬ靜代の、うつすりと紅を潮した頰に唇を押しあてて云つた。
『あなたさへ居て呉れゝば！　あなたは僕の生命の泉だ。あなたは僕を力附ける、僕は決して生活なぞに負けはしない！　僕は屹度僕の藝術を活かして見せる。そこで僕はあなたにお願ひがあるんだ』
『何で御座いますの』

『僕は、あなたを描かうと思ふ。——此の秋の蒼穹會には僕も出品しなければならないが、僕はあなたを描き度い。——もう構圖も大抵出來てゐるんです。背景は綠の樹立、着物は柔かなネル、薄い紫を帶にした立姿に、六月の感覺を描いて見度い。同時に、半ば處女、半ば人妻の、夢と現實との間のほのかな情調を描いて見度い。ねえ、モデルがあなたで描き手が僕なのだ。屹度すばらしい傑作が出來ると思ひますよ。も少ししたら、ぼつ〳〵初めよう。僕の爲めに姿勢をして呉れるでせうね』

『喜んで。——でも、私なんか駄目でせう?』

『然ういふ謙遜は、僕の藝術を侮辱する事になりますよ』

專一は一寸睨むやうにして、

『あなたは、そのまゝで僕の藝術品なんだ。だがねえ、此の大事なあなたに水仕事などをさせて、御覽、かあいゝ手が臺無しになつてしまつた』

『可厭、あなたは——』

と、靜代は、專一の手に把られた自分の手を——此頃の水のつめたさに、少しひびのきれた手

を急いで引き離すと、ぱッと赤くなりながら、その手で專一を撲つ眞似をした。

『はゝゝ!』

と、專一は意味も無く笑つたが、笑つたあとの、滿ち足りた氣持を潜めたしばらくの沈默の後で、ふと思ひ出したやうに云つた。

『さう云へばね、靜代さん。珍聞があるんだよ』

『何で御座いますの?』

『僕、今日飯田町の停留場でね、榛澤の兄貴に會つたんだよ』

『あの、龍彥さんとか仰有る?』

『さうですよ。兄貴と云つたところで——いや、兄貴には違ひ無いが、どういふものか僕は昔から兄貴といふ感じがしなくてね、だから、まあ、あんな人間の事なんかどうでもいゝんだがね』

『まあ!』

『ところがね、先生、今日は馬鹿に機嫌がいゝんだよ。——而して、此方から聞きもし無いのに近々結婚する事になつたつて、うれしさうに話して聞かして呉れたんですがね』

『それは結構で御座いますわ』

『もう婚約をして、來月早々式を擧げる。親父の方へはおれから何とか執成すから、披露の時は來て呉れなんて云つて居ましたよ。はゝゝ』

專一は嘲るやうに笑つて、

『ところで、その對手は一體何人だと思ひます？』

『判りませんわ。——私の知つてゐる方ですの？』

『勿論知つてゐる人ですよ』

『まあ、何人でせう？——あなたも御存じの方ですの？』

『勿論！——僕にとつてもあなたにとつても、忘れ難い女の一人なんです』

『何人でせうね？』

靜代は、瞳を据ゑ、唇を半ば開いて、無邪氣な表情で考へ込んだ。

『わかりませんか？——ぢや、聞かう、今、あなたが最も強い感情を以て思ひ出す女性は何人です』

『それは、あの人ですわ。あのH・Sといふ人——』

『その女なんだ。佐竹房子。兄貴が結婚しようといふのは、その佐竹房子なんですよ』

『まあ！』

『兄貴も、長い間、あの女を愛してゐたらしいんだ。——それでまあ、今度愈ゝ長い間の望みが叶つたわけなんだ。すつかり有頂天になつて居たよ』

『でも、あの方惡い方ですわ。お兄様は、屹度後悔なさるに違ひありませんわ。あの方と結婚なさる事が、お兄様の御幸福だらうとは私考へられませんの』

『だからね、僕も一寸警告を與へようかと前には思つた事もあるけれど、兄貴の奴、何しろ夢中になつてゐたんだからね。まあ、併し、あの男とあの女なら好一對といふものさ。だから案外うまく行くかも知れんとも思つてね、はゝゝ！　どうせあの手合のする事だ、猿芝居のつもりで遠くの方から見物して居るんだね』

專一は、極端な輕蔑を以て聲をあげて笑つたが、その時ふと彼の眼を掠めた一つの幻影があつた。

それは爛れたやうに泣き濡れた一双の眸であつた。恨みと耻ぢと悲しみと、それ等の感情が等分に入りまじり、わツと哭き出さうとする一髪の危機にまで迫りつめながら、涙の底に燃え搖れてゐる一双の眸であつた。『これほど思ひ續けてゐながら、それが本當にして頂け無いなんて――ぢや、私といふものがあまりかはいさうで御座います』さういふ聲が、同時に耳朶に蘇へつて來た。――『あなたから、そんな風に云はれるのは餘り辛過ぎます。あまりみじめ過ぎます。私は、自分で自分が、かはいさうになるのでございます』執拗に追ひ迫るやうな、そんな言葉が、あとから〳〵と聞えて來る。――

馬鹿な！　と、專一は自ら叱り附けて、すぐにその幻影を追ひ退けた。而して、もう一度わざとらしく笑つて見せた。

『は〻〻！　しかし、要するにそんな事は他人の事ですよ。あの人たちが何をしようが――あの人がどんなに幸福であらうが、どんなに幸福で無からうが、それが僕たちにとつて何だらう？別の世界の人の事だよ。僕たちの問題ぢや無いんだ』

彼はかう云つて、再びその愛する者を膝の上に引きよせ、薄化粧の頰に輕い接吻を與へた。

戸外には、風が、吹いてゐた。が、部屋の中には明るい灯が輝いて、二人の幸福は、その明るい灯の裡に飽和されてゐた。――淺いながらにもう春の氣配は爭はれなかつた。すぐ近くの川緣を走る電車の響も、いくらかの丸みを帶びて來た。貧しい中にも優しい心づかひを見せて、机の上の一輪挿に絕えた事のない草花の、そのほのかな紅も、なまめかしい風情に匂うてゐた。

春の一夜

世界的の名手として知られた墺地利の提琴家N氏の演奏會が、帝國劇場で催されたのは三月の初めのことであつた。靜代は、一時はピアニストとして立たうと思ひ立つた事もある程の音樂の愛好者であつた。專一は靜代の爲めに、その演奏會の切符を求めた。

『思ひ切つて一等のにしようと思つたが、まあこれで我慢しといた。明日だよ。明日は社を早退けにして二人で行かう』

專一は、二枚の切符を靜代の前に置くと、樂しさうにかう云つた。

『あら、切符お買ひになつたの』

と、靜代も嬉しさうに云つたが、

『でも、これ高いんでせう』

靜代はさう云つて氣づかはしげに專一の顏を見上げた。

『いくら高いからつて、たまには音樂位聞かなくつちや——はゝゝ、そんなに心配相な顏をしなくてもいゝよ、靜代さんもいやに世帶染みたものだなあ』と專一は笑つて、『實はもう一枚買つてお母さんも御一緒にお誘ひしようと思つたんだがね』

『お母さんは駄目ですわ。お母さんは淨瑠璃か長唄でなければ——ピアノを聞いてさへ、頭が痛くなるといふんですもの。ヴァイオリンなどはとても』

靜代は微笑しながら云つた。

『さうだつたかね。實は僕もヴァイオリンなどは解らん方だ。西洋に居るうちでさへ、音樂を聞きに行かうと思つた事はないんだがね』

『ぢや、みんな私一人の爲めなのね』

『いや、決してさういふわけぢや無いんだよ。貴女が喜んで呉れゝば、——あなたの喜びは、つ

まり僕の喜びなんだからね』

專一はそんな事を云つて機嫌よく笑つた。

その翌日の夕方、濠端の停留場で電車を捨てると、車寄せを埋めた自動車の間を縫つて、二人は劇場の中へはひつて行つた。普通の興行と違つて、いくらか選擇されてゐる客種には、その道に一家を成した者や、素人ばなれのした專門的の鑑賞家や、そんな手合も少なからず混つてゐるらしかつた。令嬢、令夫人、紳士、貴公子——さう云つた階級の人々の、流行の粹を凝らした、寶玉と寶石とにちりばめられたきらびやかな裝ひが、明るい灯影に陽炎立つて、廊下も休憩室も、慇懃な辭令と、媚を含んだ笑顏とで、さながらに賑かな客間の光景を現出してゐた。專一と靜代とは、それ等の人々を避ける樣にして、はいると直ぐに席について、演奏のはじめられるのを待つた。

十分ばかりすると、豫報の鈴がぢり〳〵と鳴つた。聽衆は四方の扉から、色彩ある流れをなして流れ込み、やがてそれ〴〵の席に着いた。しばらくして幕が上げられると、黑いモーニングにそのすらりとした長身をつゝんだN氏は、一歩々々踏みしめるやうな足どりで舞臺の上に表はれ

た。急霰のやうな拍手が聽衆の席をどよもして起つた。N氏はヴァイオリンを胸に當てて譜臺に向つて身構へした。伴奏者がピアノに就いた。聽衆は沈默のうちに緊張した。弓は靜かに絃の上をすべり出した。それにつれて、微妙な音色が、水の底から湧きあがるやうに、かなで出されたゝそこへ伴奏のピアノが最初の點滴を落す。それ自身が生物のやうな蒼白い手の動きが、次第に速度を加へて行くと、幽婉な曲節が、幻の綾を織りながら、その中に次第に次第に聽く者の魂を織り込んで行く——。曲はセザアル・フランクのソナタ。第一樂章、第二樂章と進んでゆくに伴れて、名手の神技は益ゝ冴え渡り、ある時は激しい情熱のあらしを渦卷かせ、ある時ははかなげな嘆きを誘ひ、或は大空をかけるが如く、或は草隱れにせゝらぐ如く、千變萬化の曲節は、すべての聽衆の情緒をやるせ無く搔きみだしながら、しかも、その、藝術的魅力は、實感の外の恍惚境に、陶然として聽く者の心を醉はしてしまつた。

曲が終ると、はじめて我に歸つた聽衆は、熱狂的な拍手を送つた。

『いゝわねえ』

しづかに幕が降りた時、靜代は、專一を顧みて囁いた。彼女のやゝうるんだ眼は未だうつとり

と夢見て居た。そして、頰はほんのりと上氣してゐた。昂奮が彼女の美しさを二倍にしてゐた。

『あゝ』

專一は答へながら、袂の蔭に彼女の手を探して、力を籠めて握り締めた。その小さい手は、熱ばんで少しふるへてゐた。

『だがね』

と、專一は、靜代の顏をのぞき込むやうにして、

『聽きながら——僕が、何を考へてゐたか、あなたは知つてゐる?』

『まあ、あなたは、ぢや、聽いてはいらツしやらなかつたの?』

『聽いてはゐた。が、聽きながら、僕は考へてゐたんだ。いや、考へてゐたんぢや無い、煩悶してゐたんだよ』

眞面目とも冗談ともつかぬやうな調子で專一は云つた。

『煩悶?』

靜代は、不思議さうに問ひ返した。

『もつと率直に云へば、僕は嫉妬の爲めに苦しんでゐたんです』

『まあ、どうしてでせう？　何を嫉妬なんかなすつたの？』

『N氏をですよ。――いや、むしろN氏の音樂をといふよりも、そのやうにまであなたの心を捕へる音樂そのものを、と云つた方がいゝかも知れないね。僕は、あなたが、夢中になつて音樂を聽いてゐる、あなたの心が全部音樂の方に吸ひとられてゐる――それを見ると、何だか淋しくなつて來るんだ。自分一人が置いてき堀にされたやうな氣がしてね。いかなる時、いかなる瞬間でも僕はあなたの心をしつかりと摑んでゐないと承知出來ないんだ。ところが、音樂が、あなたを僕から盜んでゆく――僕は音樂に對して嫉妬を感ぜざるを得無いんだ』

專一は微笑しながら云つた。

『まあ！』

『はゝゝ。僕は隨分やきもち燒だらう？』

『そんなでしたら、私、もう聽くのを止めてもいゝわ』

『ぢや、もう出てしまはうか？』

『えゝ。あなたのお好きのやうに――』

靜代は本當に、そのまゝ出てもいゝといふ樣子をした。

『はゝゝ。うそだよ。うそだよ』

と、專一は慌てて打消して、

『だが、一寸、廊下へ出て見ようか？　まだ十分ぐらゐある』

『えゝ』

二人は伴れ立つて廊下に出た。

廊下では、彼方此方に、二三人、又は五六人づつの一團が、N氏の藝術の感激を語り合つたり、批評を述べ合つたりしてゐた。靜代は、稍ゝ場うてのした感じで、專一の背後に身をひきそばめるやうにして歩いた。

『やあ！』

ふと、聲をかけられて、專一は驚いて、その方を見た。喫煙室の入口のところに、タキシード姿の龍彦が、白く膏切つた顏をてら〳〵とさせて立つてゐた。

『やあ』
専一も會釋を返しながら立ちどまつた。
『君も來てゐたのかい？　久振だね』
と、龍彥はにや〳〵と笑つて、
『奥さんも一緒かい？』
妙に横柄な調子であつた。
おど〳〵と赤くなつた靜代を背後に庇ふやうにしながら、
『兄さんは一人ですか？』
さう專一が云つた時、横合から衣ずれの音がして、
『都築さん、しばらく』
と、豐かな聲量を技巧的に煉つて、滴るばかりの媚を添へた臺辭染みた聲が彼の耳朶を撲つた。
振返つて見ると、今は、榛澤龍彥夫人である筈の房子が、ぱつとあたりを明るくするやうな華やかな粧ひで立つてゐた。

『やあ』
と、專一は不意打に面喰つたかたちで、慌てゝ頭を下げた
『本當にしばらくでございましたわねえ』
房子は懷かし氣に云つた。
『しばらくでした』
專一は息がつまるやうな調子で云つた。
『僕の家内として――』
龍彥が、得意さうな顏附で傍から云つた。
『改めて御懇意を願ふよ。――ところで、君のおくさんを一つ紹介して吳れ給へ』
『靜代さん』
と、專一は小さくなつて尻込をしてゐる靜代を顧みて、仕方無しに斯う紹介した。
『榛澤の兄さんだ。此方が、奥さんで、もとの佐竹房子さん。――房子さん、僕の家内です。どうぞ宜しく』

『どうぞ宜しく――』

と、靜代は口の内で云ひながら頭を下げた。

『私こそ、不束者で御座いますがどうぞよろしく御願ひ致します。――奥さんとは初對面では御座いませんわね。日外、雜司ケ谷の墓地でお目にかゝつた事が御座いますわね』

『は。兄の墓參りにまゐりました時に――』

靜代は、「兄」といふ言葉に、特に語勢を入れて云つた。そして、勇氣を振ひ起すやうにして屹と對手の顏を見上げた。此の女が、あの大事な兄さんを精神的に虐殺したのだ！　此の女が、兄さんの仇なのだ！　靜代の眼は、思はず熱ばんだ。が、房子は、そんな事には一向無頓着な樣子で、

『本當にいゝところでお目にかゝれましたわねえ。――あなた』

と、龍彦を呼びかけて、

『御一緒にお茶でも頂かうぢやあございませんか』

『あゝ。さうしよう。どうだね？』

龍彦は、專一たちを促しながら、先に立つて喫茶店の方へ歩き出した。專一は氣が進まなかつた。靜代は尙更であつたが、無下に斷る事も出來なかつたので、彼等のあとに跟いて喫茶店の扉をはひつた。

龍彦、房子、專一、靜代といふ順序で、丸い小さな卓を圍んで掛けた。

『ウイスキイ！　僕はウイスキイにしよう。どうだね君は？』

龍彦が專一に云つた。專一は頭を振つた。

『あなたは、何處へいらしつても、お酒をめしあがらないでは居られない方なのね』

房子は半ばたしなめるやうな、半ば輕蔑するやうな調子で云つた。

『なあに。飲むといふ程飲みやしないさ』

『いやね、さうして、すぐにお醉ひになるんですもの』

房子は美しい眉を押顰めた。

『はゝゝ。太だ恐縮です！』

龍彦は、少しいてれたやうにした。これだけの短い會話にも、此の夫婦の關係が、どんな風なも

のかは知られた。房子は、結婚してまだ三月にもならないのに、もう完全にその夫を征服し切つてゐた。而して、そこには亦、何となく懶げな氣持が、仕方が無いから妻になつてやつてゐるのだとでも云ひ度げな氣持が、露骨に看て取られるのであつた。

『ところで――』

と、龍彦は專一に話しかけた。

『近頃どうしてゐるい？』

『どうにかやつてゐます』

專一は、ぶツきら棒に答へた。

『そのうち、親父の氣も折れるだらうからね。折を見て僕からも話しとくが――』

『いや。まあ、此のまゝでどうにかやつて行けさうです』

『おとうさまも隨分頑固でいらッしやるのね』

と、房子が口を入れた。

『少しわからずやね。――だけど、あなたもいけないのよ。あなたが何とか執成して上げないつ

て法はないのよ』

『それは然うだが――僕自身、今のところ一寸親父の感情を害してゐるのでね』

『私のおかげで――ほゝゝ。お氣の毒ですわね』

房子は笑つたが、その笑ひの中には、へんに毒々しいものが潜んでゐた。

『でも――』

と、一寸の間の沈默の後に、房子は靜代の方へ眼をやりながら、

『靜代さん――と、たしか仰有いましたわね。靜代さんは御幸福でいらッしやいますわ』

靜代は默つて眼を伏せてゐた。

『都築さん！』

房子は、今度は專一に眼をやつて、

『あなたも御幸福よ！　――私、本當におうらやましいと存じますわ』

さう云ひながら、房子はじつと專一の顏を打ち戍るやうにした。媚びるやうな、からかふやうな、さうかと思へば、恨むやうな、悲しむやうな、さま〳〵の感情を一緒に籠めた複雜な眼の色

だつた。――底無しの淵のやうな深い〳〵眼の色だつた。――見てゐるうちにずん〳〵と引き入れられてしまひさうな、怖ろしい眼の色だつた。専一は内心の戰慄を感じながら、辛うじてその眼から逃げた。

その様子を、靜代は小鳩のやうな眼で、横の方から、そつと見てゐた。

歸りには、龍彦夫婦が家の傍まで自動車で送らうといふのをことわつて、専一と靜代とは電車で歸る事にした。

二人共妙に疲れてゐた。それに電車がひどく混んでゐたので、ぴつたりと寄添つて掛けてはゐたが、あまり口も利き合はなかつた。

飯田橋で電車を降りた。夜更けの街は水ツぽく靄立つて、頰を撫でる風も生あたゝかかつた。地を踏んでゆく足音も、甘えまつはるやうな柔かな音を立てた。

『へんな奴等に會つちやつたねえ』

から、専一が口を切つた。

『私、どうしようかと思つたわ』

『あの女、ずゐ分、圖々しいんだなあ。――一寸呆れた』

『でも、美しい事は本當に美しいのね』

すこし間を置いてから靜代が云つた。

『兄貴の奴、もう敷かれてゐるらしいね。はゝゝ。今に屹度、何か事件が持ちあがるよ』

専一は嘲るやうに云つた。

『あの人、本當に怖い人ですね』

『……』

『ねえ。あなた!』

五六歩の無言の後に、靜代が云つた。すこしふるへる聲で、思ひ入つた調子であつた。

『何?』

『あなたは、やきもち燒だつて仰有つたわねえ』

『あゝ。僕はとてもやきもち燒だよ』

專一は云つた。

『あなたばかりぢや無いわ。私だつて然うなのよ』

『靜代さんも――』

『えゝ。私も――』

『だが、僕は、別にあなたに嫉妬させるやうな事はしやしない』

『それはさうですけど――』

と、靜代は口籠つて、

『でも、私、何だかひどく不安になる事があるのよ』

『不安に？』

『えゝ。今夜も一寸そんな氣持を經驗したのよ』

『今夜？　どうして？』

靜代は、しかし答へなかつた。――彼女の心には、じつと自分の夫を見つめてゐる房子の眼が描かれてゐた。

『をかしいねえ。今夜、どうしたの？　云つて御覽！』

『……』

『え、云つて御覽』

『いゝえ。云はなくつてもいゝのよ』

『可厭だなあ。云ひ掛けて止めたりしちや』

『でも、つまらない事なんですから――』

と、靜代は詫びるやうに云つたが、又、しばらくの沈默の後に、

『あの人、私、どうしても怖いわ』

と、獨語のやうに繰返した。

靜代の云はうとする事が何であるかは、專一にもはつきりと判つた。專一は、靜代の手を握りしめて引き寄せるやうにした。而して心の中で云つた。

『此の人は何て鋭い感じを持つてゐる事だらう？　――此の人は何も彼も感じてゐる』

まことに纖する者は敏感である。――靜代は、漠然たる不安の裡に、多くの未だ知られざる

悲劇を感じてゐた。

傑作

蒼穹會といふのは、畫壇の革命兒と呼ばるゝ樺山畫伯によつて率ゐられる新進の英才を中心とした結社であつた。官設の展覽會が開かれるのと時を同じうして、場所も同じ上野に、會場さへ、二三町と離れてゐない位置に、たしか今年で三回目の展覽會が開かれたのであつた。官設の展覽會の方は、會場も廣く、出品數も多く、又、見た眼に華やかな俗受けの畫風で、唯、花見とか祭りとかに同じい年中行事の一つとして、繪のわかるわからぬに論無く、他愛もない遊山氣分で出かけてゆく一般の人足を引きつけた。蒼穹會の方は、さうした興行的な成績では到底帝展に及ぶ可くも無かつたが、本當に藝術を解する或る選ばれた鑑賞者達の同情と支持とは勿論此の方にあつた。

その蒼穹會の展覽會の入口に、午下りの日のきら〳〵と、車輪のあたりをきらめかしながら乘り附けた一臺の自動車があつた。小型の、優雅な恰好の、紫紺の色で塗られたその自動車を見た

ばかりでも、自動車の主がどんな人かは略想像された。

外にも二三臺置かれてあるその溜りに、自動車がゆるくきしつて停められると、運轉手臺から、小さつぱりした運轉手が飛び降りて恭しい會釋と共に扉をあけた。フエルト草履の片足が、色ある裾をはらりと亂して、踏臺に降り立つたかと思ふと、あたりをぱつと華やがせて、一人の麗人が、すらりとした長身を現はした。青磁色の、裾に秋草を散らした幻想模樣、黑地に金茶の、同じくモダン調の模樣を置いた帶の上には、帶止の金剛石が燦然として輝いてゐた。

『何を、愚圖々々してゐるの？　三好さん！』

美しい人は、濃い眉をぴりゝと動かして、續いて降りようと降口のところでもぞ〳〵としてゐる同乘者の方へ聲をかけた。ひどく、苛立しい、姿に似氣なく蓮葉の調子であつた。

『どつこいしよ！』

と、掛聲をしながら、突落されでもしたやうな恰好で降りたのは、古びた背廣を着て、皺くちやにしなびたボヘミアン・ネクタイを、唐もろこしの毛のやうな顎髯を生やした尖つた顎の下にぶらさげた、眼の細い、鼻の大きな男だつた。斯の美しい人の同乘者に、此のみすぼらしげな男！

二人が並んで歩き出した様子は、何人の眼にも、いかにも、不思議なものに見えた。

男は女の從者らしくは見えなかつた。が、男は、まるで從者の樣な、いや、奴隷のやうな態度だつた。彼は先づ受付へ行つて入場券を買つた。下足口では、女の脫ぐ草履を、下足番がとりあげる前に、脫ぐ傍から自分の手に持つて、何かすばらしい寶物でもあるかのやうに、恭しくそれを下足番にさし出した。

會場の中は、もう一つの、官設のそれのやうな、雜沓は見られなかつたが、それでも、かなり賑やかだつた。手にしたカタロオグと揭げられた繪とを照らし合しながら、念入りに一枚々々と眺めてゆく——而して、心を惹かれたものにぶッかると、我を忘れて、その藝術愛に燃える熱心な眼を畫面に吸ひ込まれる。そういふ觀客が多かつた。視線を束ねて見入乍ら『タッチが——』とか『テエマが——』とか囁き合つてゐる長髮の美術書生や、鉛筆を持つて手帖に何か書き込んでゐる批評家らしい人や、さういふ手合も眼に着いた。

美しい人と、みすぼらしい男と、此の奇妙な二人伴れは、さうした人達の中を潛つて第一室、第二室と見て進んだ。——美しい人の眼は、そこに揭げ連ねられた繪から繪へと唯輕く辷つて行

くだけであつた。

『おくさん！』

同伴の男は、時々立止まつて、眼にとまつた繪について、何か話しかけようと試みたが、相手はうるささうに首を振つた。而して、その男を、二三間のあとに殘して、ずん〳〵と歩み進んで行くのであつた。

が、第五室の、右側の中央の、十五號大の人物畫の前に來ると、彼女の足は、ぴたりと釘附にされた。そして强く睜られた眼の、瞳を吸ひ込まれるやうにして、じつとその畫に見入つたのであつた。

それは、濃い綠葉を背景にした若い女の像であつた。着物は灰色のネル、帶は薄い紫、それが背景の綠と柔かな色彩の調和をなして、髮を無造作な束髮にし、何を見るともなく、眼を眞面にみひらいた一人の若い女の姿を活々とそこへ浮べて居た。一見したところでは、その構圖と云ひ、筆觸と云ひ、別に變つたところもない、むしろ平凡なものにしか見えないのだが、じつと見てゐると、否應なしに惹き入れて行く不思議な魅力をその繪は有つてゐた。その魅力は一體何